かも其の平原の一部に居ながら、遂に知るを得なかつたのを、敷島への行き來に於いて見出したのは私の心の悅びである。

然し今の私しは平らかな氣分で、此の情景を味ふだけの、心も無ければ時間もない、今暫らくは人の世の渦の中で跼き働かねばならぬ、嬰退的な考へを持つのは、少し早過ぎるのは分つてゐる、けれども大和國原の此の夕靄の景色を、敎祖も靜かに眺めておいでになつたのだと思ふと、一層床しい感じさへ出て來る、三味田の側を通る時私しはいつもそれを偲んでゐた、其の景色を又暫らく見られなくなるかと思ふと、殘り惜しい感じがする。

親子の情

今度管長樣から任命されて、義弟が敎校の敎頭を止め、滿洲の管理者となつた。海外布敎の聲の高い今日、其の地に臨むことは、本人として期する所があるだらうが、同時に家族のことも考へねばならぬ。それでは充分の活動が、出來惡くからうと思つたので、或る夜七歲になる女の兒が妹と遊びに來たので、私は子供だけ留守中、預つてやらうと云ひ出した。妹も寒い滿洲の地へ子供を伴れて行くのは、氣懸りだと見えて多少心が動いてゐるらしかつたので、何れ改めて返事に來るだらうと思つてゐた。

所が其の後人傳やら、義弟などの話を聞いてみると、親は異存がない樣であるが、子供がなか〳〵承知せない、それ所か滿洲へ行くと云ふことを、喜んで待つてゐるらしいのである。無論滿洲がどんな土地であるか、どう云ふ人間が住んでゐるのか、少しも知らないのであるが、兩親が行くから伴れて行つて貰ふのだと、左樣きめてゐるらしいのである、始めの間私は、子供と云ふものは困つたものだ、それぢや仕方がないから伴れて行つて、本人が困つたら、又

伴れて歸つたらよからうと云つて置いた。

然しよく考へてみると、私はあまりに簡單に考へ過ぎてゐたのを見出した、兩親の間に生れた唯一人の兒、それを親として殘して行くのは、隨分氣懸りなことである。又子としても親の行く處なら、いかなる處へでも、安心して附いて行く所に、眞の親子の情愛があるのである。子の爲めなら親は如何なる苦勞もするだらう、親の側なら子も、暑さ寒さも堪えるであらう、左樣思ひかへした私は、其の子供の態度に尊いものを感ずることが出來た。それで親子のことは親子で處置するが儘に任せて置くことにした。

今後大會

青年會の地方大會は、私の信じてゐる年限の上からは、一ヶ年早過ぎる樣に思ふ。來年の秋に此の催しが行はれたのであれば、一層濃厚に大會氣分が、本敎全體に漲つたらう。然し來年は御大典が行はれるから、年限としては左樣あつても、事實は左樣行かないかも知れないから、後れるよりも早い方が好い譯であるから、或は今年になつたことが、却つて仕合せであつたかも分らない。

京都や大阪の行はれた頃は、未だ大會に對する氣分が現れて居なかつた、是れは大會に對する考へ方が違つてゐたからにも依るのだらうが、東京の大會が行はれる頃になつて、其の意義と効果とが、始めて強く認められたのは事實である、それは要するに大會を動機として、社會的に本敎の價値を示すと共に、敎内の氣分を一新する機緣たらしめやうと云ふのである。

青年會の總會後、各縣の人々が打ち合せてゐられたから、恐らく今後の大會は、活氣ある大會が行はれるであらうと思ふが、唯案ずる所は、一時の御祭騷ぎに終つて、それが何等の効果

も齎らさなかつたならば、折角の大會も無意義になるのであるから、出來る限り、今後の道の上に好影響を及ぼすやうに、心附けられたいことである。

大會の講演會は、青年會の方針であり、教會本部の目指してゐる、海外布教の問題で、終始してゐるのであるが、是れがどれだけ教内に刺戟を與へるか、青年會として大いに考慮すべき點だらうと思ふ。宣傳に伴ふ實際の活動が無かつたならば、徒らに空言を放つことになるのであるから、大會後の青年會は、海外布教に對して、教會本部の方針に基き、具體的方法を示して、言行一致の實を擧げなければならぬこと、思ふ。

彼

彼は學校を卒業して歸ると、直ぐに教會の青年になつた。けれども青年になることが、何を意味してゐるのか、それに依つて何が得られるのか、少しも分らなかつた。父母が本教を信じてゐると云ふことゝ、同じ樣に學校を卒業した者が、教會の青年になつてゐるから、其の道を通るのが道の人になるのだと、極く簡單に考へてゐたゞけである。

何年かの青年生活も、右の樣な譯で、得る所は何にもなかつた、三年後に父が病氣に罹り、養生する暇も無く死んで終つた。長男たる彼は當然戸主を繼がなければならないと同時に、父の會長であつた教會の後任者として教會長にならなければならなかつた。

昨日まではあまり親しみもせなかつた人や、時には彼を輕んじてゐた樣な人々の態度が一變して、教會長たる彼に敬意を表するやうになつた、彼は境遇の激變に驚いて、如何に自分を處置して良いのか、教會を如何すれば良いのか、殆んど途方に迷つてしまつた。

同時に彼の胸へ恐ろしい疑問が、頭をもたげ出した。それは自分の如き何んの信仰も無い、

又何等の眞理も會得せず、實際的な經驗も無い者が、人の頭に立つて、信仰を指導するが如きことは不可能なことである、その不可能を敢へてすることは、大なる罪惡ではなからうかと云ふことである。此の疑問の爲めに彼は非常に苦しんだ。

然し時日が彼の疑念を弱めて行つた。それから二年後の今日では、彼は周圍に現惑されて、優越した宗教家の如き態度と觀念を持つに至つた、靜夜獨り思ひに耽る時のみ、自責の念に打たれることはあるが、それは成るべく避ける樣にしてゐる。彼れの生涯に果して、眞を自覺する時が來るであらうか。

慾望の陶醉者

東京大會の前日であつた。是非水野文相に面會して置かなければならぬ必要があつて、文部省へ行つたが出違ひになり、二度文相の邸を訪問したが、二度とも留守で行く先が分らなかつたので、所々電話で問合せて貰つた結果、政友會の本部に居られると分つたから、直ちに自動車を飛ばして、同黨の本都へ行つた。

其の時は丁度午後の四時であつたが、評議員會が開催されてゐるので、それが濟む迄は面會が出來ないと云ふことで、約一時間半ほど待つて居た。所が其の日は丁度政友會の選擧祝勝會があると云ふので、新聞記者やら所謂政友などが、雲集して、廊下は人を以て埋つてゐた。

私を同道して呉れた人は、政治方面には深い關係のある人であつたから、あれは誰れだとか、是れは誰れだとか、政友會の名士を敎へて呉れた。以前から其の名を聞いて、自分で想像してゐたのと、全然其の風采や性格の違ふ人もあれば、想像の合つてゐる人もあつた。

殊に私の注意を引いたのは、全く政治などには關係のなさゝうと思へる樣な人が四五人の人に

向つて、政治ほど面白い　のはない、是れをやりだしたら止められぬなどこ氣焰を吐いてゐたことである。多分選擧に付ての話でもしてゐたのだらうが、私はそれを聞きながら、何んだか政治こ云ふことが汚されてゞもゐる樣に感じた。

評議員會が濟み、文相が階段に現れられたので、私は直ちに面會を求めて用談を話した。文相は心持よく承諾せられたので、其儘本部を辭したが、歸途私は一躍政治家たらんこ、夢みる者の多いのに思ひ至つて、人間の慾望の限り無いのと、其の慾望に陶醉せる者の、救ふべからざるものゝあるのを感じた。

書物の出版

本年の一月から十一月の大祭迄に、私は八冊の著書を發行した、四十年祭前なら兎に角、今頃になつて何故こんな事をするかと、不思議に思はれる方があるかも知れないけれど、私として、別に變つたことをしてゐる譯でもないのである。

四十年祭前には何分忙しかつたので、落付いた仕事は何にも出來なかつた。四十年祭の後仕末が濟んで、今年になつてから多少暇が出て來たので、書き流しにしてあつた原稿などを取り出して、調べてみたり讀み直してゐる中に、此の儘反古にして捨てゝしまうのは、殘り惜しいやうな氣がして來たので、せめて書物にでもして置いたら、又何かの役に立つこともあらうと思ひ付いたので、古いものを取り集めて、發行することにしたのである。

然し始めから書物になどする考へで、筆を執つたものでないから、前後に矛盾があつたり、文體が不一致であつたり、校正する時、我れながら嫌になつた事もあつたが、兎に角自分の思ひ出にもなることだこ思ふて、強いて其儘にして置いた。

斯うした譯で出版したのであるから、書店に依賴しては、或は賣れなくて損をして貰はなければならぬかも分らないと案じたので、自費で出版する事に定めたのである、今後尙四五冊は出版するつもりであるが、是れなどは未だ若い頃に書いたものであるから、讀者に迷惑をかけることだらうと思ふてゐる。

然し年齡から云つても、私には何か變化の來る時である、故に過去の私を整理する意味に於て、今回書物の發行を企圖したと云ふことを、理解して頂きたいのである。是れが私の書物を出版してゐる理由なのである。

倒れる迄

今日から私は地方大會の爲めに、九州四國、中國の各縣へ出張することになつてゐる。此の事は一ケ月前から、指命されてあつたので、其の覺悟で居たのであるが、東京大會を濟せた其の夕方、吐血したのが原因で、身體の具合が非常に惡るかつたので、養生したいと思つてゐたのであるが、大祭やら青年會の總會の爲めに、其の暇が無かつたので、惡るいながら辛棒してゐたのであるが、是れ以上二十日以上の旅は、實際不可能であると思はれたので、二十五日の和樂會で、管長に誰れかと代へて預きたいと御願いしたのである。所が管長は內になど居ると尙ほ惡るくなるのだから、倒れる迄行つたらよからうと云ふ御言葉であつた。

人間から考へたら、是れは無理な言葉であるかも知れない。けれども私には左樣は考へられない。是れは當然な言葉だと思はれたので、其の心で行けば御守護を頂けると思ひますから、倒れる迄遣らして頂きますと御答へ申し上げて置いたのである。

其の後私の身體も追々快方には向つて居るが、未だすつきり良いと云ふ譯には行かない、け

れども行くべき日が來たのであるから、今夕六時に出發する。

各地の大會が私の無氣力に依つて、惡るい影響を與へる樣なことは無からうか、出發に際して是れのみが、私の心に懸る點である。幸ひに身體が健康になり、大會が盛大に行はれたならば申し分はないのであるが、唯氣力の弱いことが、講演をする場合など、特に氣使はれるのである。

出發を目の前に控へて、私は是の事を案ずると共に、神の守護を祈らずには居られない、同時に各地の人々に對して、期待を裏切る樣な場合があるかも知れないのを豫め御詫する心の切なるものがある。

終末の言葉

何んと名付くべきかと、色々に苦心して遂に書齋の灯として書きかけた此の隨筆も一ヶ年を經過して、本稿を以つて終ることになつた。顧みると隨分勝手なことを書いたものだと、呆れることもないではないが、私の私生活を通じて、本敎の動きと云ふやうなものを、多少感じて下さつた方もあるだらうと思ふて、自ら慰めてゐる譯である。

來年になつたら、又何とか名でも改めて斯うしたものを書くかと尋ねられても、今の所何とも答へることが出來ない、何故なら私と云ふものは、何事にしても約束すると云ふことが嫌なのである、是れが爲めに隨分惡く思はれたり、損をすることが暫々あるのであるが、約束して多少とも自分の身體なり心なりを、束縛せられると云ふことが、堪え難い程苦しいからである。

殊に昨年や今年の樣に、多少時間の餘裕のある時は、無理にでも定まつた仕事は、片付けて行けるけれども、來年も今年の樣に暇だと、誰れが保證出來やう、忙しくなつたら約束して置いても其の約が果たせないから、成るべく約束などはせないに限る。

然し今度私が本誌の主幹になることに、同人よつて定めたと云ふのであるから、全くの無關係であることも、事實が許さぬ譯であるから、來年になつたら、又た來年になつたやうに、出來得るかぎりは、努力してみるつもりである、唯書齋の灯の如き形式を採るか如何かは、今の場合定めるのは困難である。

最後に書齋の灯は、私の一家言として味ふて下さつて、始めて意味があるのであつて、若し私を取り去つて讀んで下さつたら、何の興味も無いものであることを、申添へて置きたいと思ふ。

卷頭言

年頭所感

大正十六年の新春を迎へて、先づ念頭に浮び來るは、部下一般教會が、如何に本年を送るやの問題是れである。惟ふに昨年は年祭の隋勢に依つて、辛じて頽勢を維持し得たが、教會も社會と沒交渉の存在でないから、社會の不景氣に影響せられて、月と共に維持困難の狀態に陷りつゝあるのは何人も認めねばならぬ事實である。

理想的な立場から云へば、信仰が生活に累せれらるのは、未だ信仰が徹底せぬからではあるが、然し一面現實的に觀たならば、未だ信仰の徹底せぬ者が教師となり、僅少の信徒を集めて結成したる教會に對して、理想的な信仰を要求するのは、未だ成長せざる少年に向つて壯者と等しき重荷を負はすものではないか。

然し現實の問題として、信仰と生活が互ひに入り亂れて、教師の内的信仰と實際生活との間に、又教會の結合的信仰と維持問題との間に、種々なる葛藤を造りつゝあるは何んとしても否定の出來ぬ事實だ。

斯うした狀態が何時迄續くかは、誰れしも豫想し得られぬことであるが、恐らく今年を過せば、多少は社會も變化するであらうから、教會維持の困難も緩和せらるゝであらうから、最も困難を感ずるのは此の大正十六年である。其の困難の道を如何に踏破すべきか、信仰ある者は此の困難を悅び迎へて、自己を培養すると共に、教會維持の問題も解決するであらうが、不幸にして信仰淺き者は、生活の壓迫に堪え兼ねて、道を失ふ者もあれば、身を亡ぼす者も現れるであらう。

神の試練は此所にある、繁茂したる樹木に落葉時が來る如く、本教は今や試練に依つて内に力を養ふべき時である。徒らに疲勞を口實として自己を慰むべきではない、問題は時々刻々に迫つてゐるのであるから、不安を感ずる者は先輩の指導を受け、信仰を早やく確立して、生活上の種々なる問題に囚はれることなく、毅然として强き信念の上から、總てを解決せなければならぬ。

是れ自己の生きる道なるのみならず、教會を生かす道にして、同時に又た社會を生かす道なるが故に、一般教會が早やく玆に覺醒すれば、行詰れる現狀は變化し、教師は生活の安定を得

べく、教會は維持の困難を脱し、教勢の更らに進展すべきものあるを信ずるのである。

神懸の考察

教祖の私生活と神生活とを、截然區別するものは、四十一歳の神懸の事實である。此の事實の太き線に依つて、教祖の内的生活は全然一新せられ、光輝ある御道の生活が始まつたのである。

此の神懸が本教誕生の第一聲として、何人も敬仰し尊重する所があるが、神懸の事實に對する考察に至つては、全然閑却されたるが如く、僅かに教祖行傳の中に、超然的事實として取扱はれるに過ぎない。

然し因果の法則が動かすべからざる眞理である以上、神懸の一事も亦此の法則に支配され、必然の過程を經て實現したものと觀なければ、吾人の知的滿足を充たす事は不可能である。

教祖が神人であると云ふ理由を以つて、教祖の言行を特別の範疇で律せんとするのは、教祖の眞價を却つて損ずるものである。況んや神懸の如き大事に就ては其の依つて來たる所を、飽く迄討檢せなければならぬ。

『十年の間見澄して居たが、其の心が變らないので』神懸があつたと云ふ說明は事實を其儘

に物語られたのであらうが、神懸の大事はもつと深い根底と、必然的な過程から來てゐるのでは無からうか。

是れには教祖の内的生活を、心理的に考察して見る必要がある。何故なら教祖は神人であるとしても、神人の一境に到達せられる迄の經過は、心理的研究の方に着眼すべき點であるからである。

斯くの如き研究は或は教祖を冒瀆するが如く誤解せらるゝかも知れぬが、徒らに教祖を祭り上げて、教祖御苦勞の眞味を味はねば、教祖の偉大性を發揮する譯には行かない。故に吾人は神人として教祖を思慕すると共に、人間としての教祖の内生活に向つて、考察の道を開かねばならぬ。

其の劈頭に神懸の事實に對して、深き考察の眼を注ぐことは、當然の歩みとせねばならぬ。昭和の新春に際して、吾人は神懸考察の大事を敢へて力說するものである。

緊縮と布教

好況時代に次いで來るべきは悲況時代である。四十年祭前が本教の好況時代こするならば、年祭後の現在は當然悲況時代こ觀なければならない。

悲況時代に處する方針は、總てを極力緊縮することであるが、玆で一考せなければならぬこことは、宗教は何等成産的事業でないこことである。從つて宗教の緊縮方針などは、言葉としては在つても其の事實は存在せないのである。何故なら宗教の使命を緊縮するなどは、あまりに滑稽な云ひ草であるからである。

然かも尙更緊縮を唱へらるゝは、宗教の本質に付いての問題ではなくして、教會制度に關する方針である。年祭以前は大勢に驅られて、何事も放漫に流れ過ぎてゐた。熱に浮かされた樣になつて、騷ぎ過ぎてゐた。是れでは將來が案ぜられる。玆に緊縮方針が現れて來る。是れは至極自然の趨移である。

教會制度或は今一歩進めて云へば、教廳を中心こする施設に對して、緊縮力針を採るのは宜

敷いが、若し本教の使命の自覺に對して、緊縮方針を採るなどゝ云ふことは、絶對に排斥せなければならぬ。何故なら人を助け世を救ふことを遠慮したならば、それこそ本教自體の破滅となるからである。

故に一面に於いては此所暫らく、消極的な方法に依つて、內容を整理し其の充實も量らねばならぬが、他の一面に於いては、年祭前よりも一層積極的な態度で布教に從事せなければならぬと思ふ。是れは五十年祭が近づくからとか、教會を盛んにせなければならぬからこか、左樣な意味から云ふのではない、人間が本當の生き方をするのには、是れより以上の幸福なる生活がないからである。

布教を困難と感じたり、其の生活を苦しとするのは、未だ本當の事が分つてゐないからである。助ける爲めに助けるのでなく、助かるが故に助けるのでなければならぬ。其所には唯積極的方法より無い譯である。

個性の完成

個性を沒却し理法に從つて、純眞なる生活を營まんと、念願する所に信仰生活の深い意義があるのであるが、單に個性を沒却することのみを以つて、信仰の如く思惟してゐた、爾來の信仰的態度は、決して正しいものであるとは云へない。

個性を捨てる以上、その個性に代へるだけの、否それ以上の何物かを把握せなければ、自己捨棄の意義はないのである。然るに個性を捨てた、茫然自失の如き生活が、信仰であるかの如く誤信し、徒らに日を送るを能事とするは、笑ふに堪えたる低腦である。

信仰の本義から云へば、個性を捨てるのは決して其の目的ではない、個性の依つて來る根本義を悟得せんが爲めの手段であつて、若し其の理法を會得したならば、再び個性を取り返へし其の個性の光を發揮せなければならぬ、玆に信仰の全たき意義があるのである。

然るに個性を顧みず、唯屈從するのを以つて、從順なる信仰と思ふ者は、神に對して從順なることゝ、人に對する屈從とを同一視し、唯從ふことのみに依つて自己の生活を保證せられた

となし、甚だしきに至つては是れが名譽でもあるかの如く觀じ、得々たる者あるは、蓋し悲慘の極みである。

來るべき本教の新時代は、個性を徒らに放棄する盲動者はなく、個性の依つて來る所を究め個性の伸展と其の完成に努力するであらう。若し此の點を閑却したならば、恐らく本教は量的には發達するであらうが、質的には停止の狀態に陷る。故に今後は個性を無視するが如き非人間的な態度を捨てゝ、個性を尊重して行かなければならぬ。

殊に本教の將來を荷負ふ青年は、日に亡びゆく老人と異なつて、自己完成に努力せなければならぬのであるから、手段として個性を捨てるならばよいが、目的とするが如き誤つたる信仰から脫して、教祖の薫化に依つて自己完成に猛進せなければならぬ。

本教の立場

一昨年普選が議會を通過して、宗教家も被選擧權を得ることになり、又た昨年以來宗教法案が問題となつて、議會で論議せられてゐるが、斯うした改治的色彩を帶びた、宗教問題が社會の表面に現はれる樣になつてから、宗教に對する社會の態度が、著しく更新せられたのは事實である。

此の傾向を最も明らかに示してゐるのは、有力なる新聞が特に宗教欄を設けて、宗教家たる知名の士の所說を紹介し始めた一事である。現在では未だ二三の新聞であるが、社會の人心が既に宗教に多少とも興味を感じて來た以上、今後は更らに他の新聞も、宗教の紹介を一部門とするに至るであらうと思ふ。

是れは思想上から考察しても、大正年代は極端なる官能生活が、人心を風靡して居たのであるが、今や其の反動として嚴肅なる生活を、多くの人は期待してゐるのである。眞面目な眞實な生活は最後に宗教生活に之を求めなければならぬのであるから、思想的方面から推考して

も、宗教に對する社會の要求が、當然起つて來なければならぬ時期に遭遇してゐるのである。

然るに本教が社會に、どれだけ理解されて居るかと云へば、始んど語るに足らぬ程である。過日貴族院の本會議で、或る議員が演べた所に依ると、宗教らしい天理教と稱せられてゐるのである。是れを以つて觀ても、世人が本教を理解せることの、如何に貧弱なるかゞ伺はれる。

吾人は本教が社會の風潮に注目して、妄りに宣傳を行ふのは、全然排斥するものではあるが從來の如く消極的態度を持して、本教の眞價を發揮せないのに、決して讃すべき方針ではない。堂々たる態度で本教を發表し、本教の眞價を理解せしめる爲めに、今や本教徒の立つべき時では無からうか。

時代に目醒めて居るべき筈の青年が、溫室の花の如き美を誇る時は過ぎた。社會の街頭に飛び出して、本教弘通の爲めに、苦難の生活を求むべきではないか。吾人は來るべき新時代を脊負ふ青年が、時代の傾向を注視し、適應する活動に努力せられんことを、衷心より望むのである。

講習會

陽春四月を期して、本部主催の大講習會を、お地場に於いて開催し、支教會長以上の教師千數百名に對して、新たに教養の道を開拓せらるゝ、是の壯擧を迎へんこするのである。

齎らすべく、吾人は深甚の期待を以つて、是の革新的企圖は、重大なる意味を本教に

然し今回講師こして聘せらるゝ、教外の知名の士は、專門的知識を窮めたる學者か、社會的實際經驗に富める識者なれば、其の說く所極めて深く、其の語る所必らず廣かるべきを以つて本教々師の理解力が及ぶべきや否や、多少杞憂せらるゝ所もある。

翻つて講師の立場からも、相當講話や講演に依つて、聽講の訓練を得て居るこは云へ、理解し難き態度を示された場合には、尠らず苦心せらるゝここは無からうか、況んや說く者と聞く者こ、何等精神的の交涉が欠けてゐる場合、一層其の感が深からうと思ふ。

然し右は實際の場合を云つたのであるが、是の新しき試みこしてこの講習會が、沈靜なる本教の現在に大なる刺戟となつて、淸新なる方面に發展する動因こなるならば、教會史の頁を飾

るべき、意義ある出來事に相違ない。

唯吾人として冀ふ所は、恰も水こ油この感ある講師と聽者とを、其の局に當る人の配慮に依り、何等の問題も引き起さずに、總てが圓滑に談笑の間に、講習の局を結ばれたいここである。

同時に聽講者としても、從來行はれた講習會と、其の計畫が全然違ふのであるから、聽講するには、其の心持を一變して臨まないと、或は期待に反するが如き感が起らぬこも云へぬ。

故に豫め其の精神的準備をして、單に聽講するのみならず、多少は批判し得るだけの覺悟を以つて、出席せられんここを望むのである。

時代は進展して行く、本教も今や力を養つて、大いに伸びんとしてゐる。此の時代の劃期的な企圖は、必らず本教徒の心を更新し、將來に向つて勇躍すべき、力强い聲こなるであらう。

宗法の最後

新聞の報ずる所に依れば、今期貴族院に提出せられたる宗教法案は、委員會に於いて幾回かの質問の後、委員會が中止になつて、握潰しの終局を見たと云ふのである。

昨年同法案の調査會が設立せられた時、本教に於ても相當論議されたが、一日、下村局長を東京支廳に招き、種々質問する所があつて、大體立案の精神及び實際上の取扱に付いて知るを得、神道各派を通じて、多少の修正を希望したに過ぎない。

其後同法案は幾度か調査會に於て審議せられ、相當修正を加へられた上、法制局に於いて更らに嚴密なる、審議に附せられたる後議會に提出せられ、先づ貴族院に於いて論議せられることになつた。

委員會に於いては、隨分手嚴しい質問が、開會毎に試みられた。就中花井、水野の兩氏の如きは、絶體反對を標榜して鮮やかなる反對意見を述べた。是れに對する當局の辯明は、甚だ振はぬものがあつた。

其の結果握り潰しになるか、然らずんば大修正を行ふた上で、貴族院を通過せしめるだらうと、一般に豫想されてゐたのであるが、其の豫想通り、握り潰しの運命に陷つたのである。

然し吾人は此の握り潰しが、宗法の當然の歸結であるかも知れぬが、出來るならば大修正を加へて然る後通過した方が、本教の爲めでは無かつたかと思ふ。

何故なら本教は各府縣に依つて、宗教取扱の縣令が行はれてゐて、甲の是とする所を乙は非とし、甚だ不統一であるのに困り切つてゐる。是れ等が宗法に依つて統一されるならば甚だ結構である。

唯本教として特に問題とすべきは、教師の資格問題である。然し委員會の意見に依り、是れに宗教を理解した修正が行はれたならば、宗法に對して本教は別に問題はないのである。

當局は來期議會に、再び宗教法案を提出すると言明してゐる。願はくば今回の質問を考慮し一層完全なる法案を制定し、以つて宗教の發達を增進する爲めに議會の贊擧を得られんことを。

改築の旬

世直りの旬を標語とし、全教を擧げて活動した、教祖四十年祭も過ぎ、續いて如何なる旬が現るべきか、深き興味を以つて待たれてゐたが、昨年一ケ年は殆んど何等の片影をも認めずして過ぎた。

本年に入つて最も注意すべき出來事として、吾人の耳朶に響いて來たのは、教會改築の叫びである。是れを本部直轄の教會に就いて觀るも、敷島、甲賀の改築は、從前より計畫される所其の他郡山、湖東、水口の移轉改築あり、東京には東、日本橋が復興新築に直面してゐる。尙ほ相談中に屬するものに、中和、櫻井城法等に、移轉改築の議ありと聞く。

斯く數へ來たらば、本教の大半は今や改築を問題として、是れに向つて全幅の力を致さんとしつゝあるのである。海外布教か、文書傳道か、如何なる方面に時旬の理が現るべきかと、多少豫想もしてゐたが、是れに依つて見れば、計らずも教會改築の上に、神意が現れて來たかに感ぜられるのである。

是れを年譜の上から考察しても、本教第一期の建築物たる明治二十四五年乃至は六七年頃に建築せられたる教會は、何人と雖も本教の今日あるを豫期せなかつた頃の建物であるから、甚だ狹隘であると同時に粗末であり、相當勢力ある教會としては、困り切つてゐるのである。故に改築を望むのは當然と云はねばならぬ。

唯問題とすべきは、四十年祭後教内が疲勞してゐるのと、社會一般に經濟界が不況である爲め、思ひ切つて改築に着手し得べきや否やである。然し若し教會改築を望むならば、今此の時を外にしては、全く時が無いのである。何故なら四五年後には吾人の豫想にして間違ひなくば、本部より五十年祭の提唱があるからである。

然し吾人は決して教會改築を奬勵するのではない。唯總ての方面から綜合して、目下本教の大勢は改築にある事を指示し、改築が時であり旬であることを、明示すれば足りるのである。其の教理的説明は、茲に語るの要はなからうと思ふ。

社會を觀よ

宗教の本質から觀れば、飽く迄自己を練磨し、其の信仰を深化せしめて、神一條の世界に突き進んで行くべきである。然し社會より超越して、獨自の生活を許された時代ならば兎に角近代生活の如く、總てが複雜なる關係に於て、結合せられたる時代には、社會を切り離して單獨の生活は不可能であるから、自己の信仰乃至情操を、向上せしめんと欲するならば、勢ひ其の環境たる社會の改造に向つて、努力せなければならぬ筈である。

宗教が一面に於いて、信仰の精進に專念すると共に、他の一面に於いて、社會の教化乃至は救濟に、熱烈なる活動をなすのは、全く是れが爲めである。是の二方面は如何なる宗教も有する不可分的のものであるが、時と場合に依りて消長あるは止むを得ない。又宗派によりて其の一面のみを重く、他を顧みないものもある。然し何れにしても、是の兩面が宗教の本質と作用となるのであるから。必らず兩者を具備せるは當然である。

本教の信仰內容が、目下如何なる狀態にあるか、是れは暫らく問はぬとして、社會の救濟乃

至教化に、本教が今後活動するとすれば、當面の問題として起るべきは、本教徒は如何に社會を觀ずるかと云ふ點である。教祖の傳道時代と昭和の現代とは、著しく社會が變化してゐるのである。從つて其の社會の觀方が誤つたならば、醫者の誤診と同じく、折角の投藥も何等の功もなさぬ如く、熱烈なる傳道も布教も、無意義に終るのである。

然るに本教では爾來總ての人々が信仰の向上と、病人の救濟のみに沒頭して、社會に對する知識を著しく欠いてゐる。觀方に依れば是れも決して惡るくはない、然し是の社會知識の缺乏が、延いて本教の發展に尠からぬ弊害をなしてゐることも事實である。何故なら教師の人格を論ぜられるのは、全く社會的の知識が無いからである。

是の社會的知識があつて、始めて社會を正しく理解し得られるので、斯くて教化乃至救濟も時代に應じてなされるのであるかち、相當の社會的知識を獲得し以て社會を正解し、本教の活動的方面を、違感なく伸展せしめねばならぬ。

本教の經濟

若槻内閣が瓦解して、財界は極度の混亂に陷り、人心は安定を失つて銀行の取付となり、田中内閣成立し、モラトリアムを施行して、僅かに一時を繃縫し、臨時議會を召集して、五億圓の巨費を投げ出し、辛じて財界の平靜を得るに至つたのである。

爾來信仰と經濟とは、何等の關係なしとの觀念に依りて、教養せられたる者は、今尚ほ然か觀じ然か信じつゝある。成程信仰自體とは沒交渉であるかも知れぬが、信仰生活と經濟とは無關係ではない。況んや殿堂を建て教師を養ふ教會が、經濟的の觀念なくして、維持し得られる道理はない。

財界の混亂に對して、本教の人々が殆んど對岸の火災視して居たのは、經濟的知識の缺乏と其の影響が直接でなかつたからである。然し此の大動搖が波紋を描いて、四五ヶ月後には、必らず教會の上にも、直接の影響となつて現れるに相違ない。

斯樣に近代生活に於いては、凡てが經濟的基礎の上に組み立てられてゐるのであるから、經

濟的知識を相當に持つてゐなければ、それが爲めに思はぬ不覺を招かぬとも限らぬ。殊に教會等に於ては、最も其の必要がある。

教會の盛衰は無論本質的には、信仰の强弱に依つて定まるのであるが、然し其の信仰も實際問題として、過去の歷史に徵すると、經濟的基礎如何に依つて、動搖してゐることも事實であるから、信仰の向上と共に、經濟の基礎を或る程度迄は堅めることも必要である。

最近新設教會が維持困難の爲め、種々な弊害を流してゐるが、是れなども財界が好調であつたら、其の信仰も向上せしめ、内容を充實せしめたのであらうが、生活に追はれる結果は、止むなく道なき道を踏むに至るのである。

是を要するに今後は、總ての人に之を求むる譯では無いが、本教の經濟が如何になりつゝあるか、其の他經濟に關する諸問題を研究し、本教の根底を基礎付け、將來不安の念なきやう努力することも、刻下の急務であると思ふ。

社會心の透觀

信仰が猛烈な勢で、弘通するのは、教祖の優秀なる人格、感化力の充實せる教義、傳道慾に燃え立つた布教師に依つて、始めて期し得られるのは事實に相違ないが、社會心を透觀する機能が缺けて居たならば、遼原に火を放つが如き傳播は到底望み得ないのである。

本教が立教せられた當時、暴風が草を靡かすが如き勢で、四方に傳道せられたのは、よく社會心を理解し洞察し得たからである。社會心と何等の共鳴もなく、其の說く所、其の語る所が全然沒交渉であつたならば、速やかに傳播すべき筈がない。

由來新たなる信仰は、其の發表が個人に依つてせられても、其の個人の背後には、社會心が大きい力となつて隱れてゐるのである。是れは時代と宗教との關係に於いて、歷史が明らかに示してゐる所である。

從つて信仰が社會心と、深き關係を持つておれば、それだけ信仰が社會化されて行く譯で、弘通が迅速に行はれるのである。故に社會心を把握するのは、宗教として重要なる條件の一つ

である。

然るに教團が組織せられて、其の教線内に生活する者は、年代を經過するに從つて、教團意識は濃厚になるけれども、社會心に接觸する機會が、漸次尠なくなる結果、社會心に對して盲目となり、世俗で云ふ井戸の蛙となるのである。

若し社會心に盲目なる心の持主が、其の教團に數を增したならば、其の宗教の前途は甚だ暗澹たるものである。社會より孤立して徒らに形體の如き殿堂を守り、意義も生氣もなき生命を送るに至るのである。

本教は其所まで無論行詰つて居ない、然し社會心にどれだけ接觸し、何處まで理解し、どれだけの透觀を持つてゐるかとなれば、未だ眞に迫つてゐるものがない、社會の問題が直ちに自己の問題の如く、打てば響く程には共鳴してゐない。

本教が社會の全面に渡つて、其の弘通を欲するならば、先づ此の社會心を確實に把握し、然る後に傳道せなければならぬ。是れを忘れたならば、一世を風靡する底の大布教は、空想に終るべきを斷言するものである。

海外視察

教年以前より本教當面の問題として、海外布教が高調されてから、外國語學校の創立となり漸次其の氣運か熟しつゝあることは、周知の事實である。

殊に昨年夏期休暇を利用して、管長樣が鮮滿地方を視察せられたことは、本教に大きい刺戟を與へ、各教會に於いても役員等を同地方に派遣し、親しく視察せしめて、將來の布教に資せんとしてゐる。

更らに先般鮮滿布教管理所主催の下に、本社が後援して計畫した。鮮滿視察團は目下旅行中であるが、團員二十六名が歸國したならば、必らず海外布教の好資材を齎らすことゝ信じてゐる。

斯く鮮滿地方に本教徒の注目が集つて來た際、又た新らたなる計畫の發表を聞くを得たのは、甚だ欣幸に堪えない所である。

それは天理外國語學校が、第三學年の旅行として、各語部に依り、其の方面を異にして、大

旅行を試みんとするのである。

聞く所に依れば、南支那方面、北支那方面、浦鹽方面、朝鮮方面、馬來方面の五つに分れて、長きは四十五日、短かきも一ヶ月程の豫定だとの事である。

殊に吾人の最も痛快に感ずるのは、女生徒の旅行と共に、本教の婦人にも同行を許した一事である。海外布教は獨り男子のみの仕事ではない、女子の共力を待つ所甚だ多いのであるから、吾人は此の擧を歡迎するものである。

斯く本教徒の眼は、鮮滿地方より漸次東洋全土に行き渡らんとしてゐる、海外布教の論議は既に盡きた、今後は實行の時である、其の第一歩として、視察の行はれるのは蓋し當然である。

此の意味に於いて、各教會に於いても、海外視察に對して相當の注意を拂ふべきが、旬に從ふものではなからうか。若し此の旬に後れたならば、或は本教の海外發展に、落伍せなければならぬとも限らぬ、敢て各位の一考を乞ふ。

教義の公表

本教々義として最も重要なるは、神樂歌、御筆先、御指圖の三種である。神樂歌は儀式と直接關係があるので、既に早やくから發表され、信徒の間に膾炙されて居るが、御筆先御指圖に至つては、未だ嘗て公表せられた事がなかつた。

教義の發表は教旨を流布せしめる上に、最も必要な事でありながら、秘密に藏せられてあつたのは何故か、明治十年前後の無智な警官が、猥りに書類を沒收したのと、悪意を以つて本教を傷けんと、教義を曲解する者多く現れたので、其の發表が躊躇せられて、今日に及んだのである。

然るに本教が教義を發表せないで、飽く迄秘密にしてゐるのは、何か重大なるものが存する故と、今度は逆に想像を逞うして、本教の眞意を疑ひ、牽强附會の說をなす者さへ生ずるに至つた。

幸ひ一昨年以來、教義集成部が設置せられ、御指圖の拾集や、御筆先の研究が著く進めら

れてあつた際、或る動機に依つて、最近兩者の著作權を得たので、此の機會に教義を公表し、本教の眞意を徹底せしむる事となつた。

今日迄も教義書は印刷に附し、巷間に傳はるものがあるが、是れ等は唯傳寫せられたものを、活字としたのみで、何等信據を置くに足らぬ。今回發表せらるゝものは、集成部に於て嚴密に調査し、論議を經たる結果なれば、恐らく是れ以上正確なるものは、無い筈である。

教義の發表が本教に如何なる刺戟を與へるか、思想的に何等の變動はなきか、幾多の疑點が生じはせぬか、斯く考へ來る時は教義の發表は、確かに大膽な計畫であると共に、本教に一期限を畫するものである。

想ふに教義が發表せられたら、暫くは教義研究時代が現出するであらう。研究に研究を重ねて、然る後如何なるものを摑むであらうか、本教の近き將來はそれに依つて決定されると云へる。

兎に角布教の行き詰つた今日、教義の公表を發表せられる事は、洵に時宜を得た處置で、將來の問題は別として、本教徒の爲めに衷心より感謝するものである。

實行に徹せよ

教祖時代は無論のこと、高弟時代に於ても、本教は社會から隨分惡評を受けて來た、然し如何なる惡評も、正しい事實の前には必ず消滅すべきを信じ、何等の辯解もせず、默々として眞實の助けに從ひ、本教今日の基礎を樹立せられたのである。

本教自身の立場から云へば、僅々四十年間にして、今日の隆盛を觀るに至つたのは、教界空前の出來事の如く考へてゐるが、一歩世界の大きい舞臺から眺めたならば、決して驚く程のものではない、むしろ世界の進歩に比較して、神樣と共に道後れたりの感に打たれるのである、然るに世界を顧みない人には、本教の隆盛が最上のものであると觀ずるが故に、早くも小成に息はんとする傾向があるのは甚だ嘆ずべき現象である。

本教をして眞に教祖の理想の如く、世界一列に教化せんと欲するならば、未だ未だ本教の隆盛など、謳歌してゐるべき時ではない。日本に於ても教線を一歩踏み出したらば、本教に對する反對や惡評が、折り重なつて待つてゐるのである。其の間を縫ふて道を八方に附けて行かね

ばならぬのであるから、餘程强い信念と實行力とがなくてはならぬ。

然るに現在の本教徒は、通じて實行力が甚だ弱くなつてゐる、道を踏む爲めの苦痛や難儀にさへ、其の意志が崩れ勝ちである、進んで人を助け教化するの困難に出合ふと、直ちに退轉する有樣である、是れでは將來の發展は望まれない譯ではないか。

想ふに是れはあまり人間的な考へが多過ぎるのではなからうか、人に笑はれても人に罵られても、神樣に對して自分の爲すべきことは、着々と實行して行く決心と覺悟さへあつたならば、少しも恐れる事もなければ氣にすることも無い筈である、申譯をしたり說明したりするのは、要するに未だ人間的な考へがあるからである、人間心を一切打ち捨てゝ、神一條に基き、默々として實行する所に、神人一致の働きが出來るのである、然かも今は斯くあるべき時であり旬である。

近代人の自殺

死に對する恐怖の觀念が、藝術に徹底せる者や、科學に目醒めたる者に、殆んど無關心であることは、近代の新しい傾向である。智識階級に屬する者が、舊來の傳統的觀念から脫して、清新な時代の空氣を呼吸し、死の驚異を感ぜなくなつたことは、全く泰西文明の影響である。吾人は日本の進歩せる階級の人々が、此の心境に到達し得たることを、決して非難するものではない。

然し死に對する恐怖が無いから、死を弄んで自殺するが如き行爲は、大いに考ふべき餘地があると思ふ。何故なら人生の極地は死の恐怖から、超越することのみではない。藝術の世界、科學の天地は、或は其の一線に於いて盡くるかも知れないが、異なる世界が更らに展開してゐるのである。それが卽ち宗敎の領域である。

日本の政府は極力、敎育と宗敎とを分離し、相犯さしめない方針の下に、新敎育を國民に施したのである。從つて特に機緣があつて信仰を求めた者以外は、全然宗敎の何たるやを解し

ない、愚昧なる人々の後世欣求の方便か、薄志の徒が避難所ぐらゐに心得てゐるのである。是れは蓋し敎育の局に當る人々が、あまりに近眼者であつたことを、今日漸く意識せらるゝに至つたのである。

敎育と宗敎とは、決して分離すべきものでなく、互ひに相補ふて行かねば、完全に敎育するこの出來ないのを自覺し、近時敎育者と宗敎家とが、相接近しつゝあるのは、喜ぶべき現象である。若し此の理想が實現し、敎育に宗敎的敎化が加味せらるゝならば、當然宗敎に對する興味も起り、信仰も培養せられる譯である。

斯くなれば無信仰者が、人生の極地として死を覺悟した場合にも、新しい天地が眼前に展開し來たるから、自殺するが如き手段を擇ばぬのみか、死の自覺に依つて得たる心境を更らに向上せしめて、徹底的信仰を把握するに至るべきである。

故に吾人は近代人の精神的行き詰りを一轉して、更らに大なる意義あらしむる爲めに、宗敎的敎化の必要を、繰り返へし力說せんと欲するものである。

教師の整理

教校の卒業生が多ければ多いだけ、教師に補命せられる者も多くなる道理で、四十年祭提唱以來、二三倍加したのは事實である。此の四五萬の教師が、教校で教養せられたからと云つて、充分教師としての使命を全うするだけの、信仰と常識を有してゐるだらうか、甚だ疑はしいのである。

然し信仰は何んこ云つても個人的のものであるから、或る者は在校中に信仰の要諦を確實に握つたであらうが、又或る者は殆んど六ヶ月間を空費したものもあらう。其の成績は卒業後各自の郷里に歸り、如何なる信仰に依り、如何なる生活を爲しつゝあるかを檢したならば、直ちに察知することが出來るのである。

聞く所に依るこ、卒業生の殆んど七八割は、卒業後自己の生業に從事し、布教に專念してゐる者は、僅かに二三割に過ぎないと云ふことである。尤も教會に依り、地方に依り、其の割合が增減するのは止むを得ないが、兎に角右の如き卒業生の成績は、本教として相當注意すべき

點でなからうか。

年祭後教會に對しては、內容充實の必要が力說せられ、其の整理に言及されてゐるが、教師に對しては未だ何等の處置も採られてゐない。然し本教が對外的に其の價値を卜せられるのは、教會よりもむしろ教師の人格に依るのであるから、今後は教師に對しても、整理をするなり教養の方法を構ぜられねばならぬと思ふ。

教師自分の立場から云つても、六ヶ月間地場に歸つて、教校に通學したのは、生業するが爲めでは無かつた筈である。たこへ業務に從事してゐても、暇があれば布教をする爲めであつた。然るに教校を卒業し、布教の自由が與へられるやうになつて、教師としての使命を捨てゝ顧みないのは、思はざるの甚だしきものである。

近時經濟的不安が、本教にも流れ込んでゐるので、或はそれに累せられて、信仰的生活に入ることを躊躇してゐるのかも知れないが、それは神を信ずる者の問題とすべきこではない、斷々乎こして其の所信に向つて進まねばならぬ。

信仰もなく正しき道も踏まず、徒らに教師の名を持てるに過ぎない者に對しては、不純を一

掃する意味に於いて、教師の大整理を行ふことも、本教の現勢を覺醒せしむる清涼劑ではなからうか、遠からず左様した日の來るべきを、豫想せずにはゐられぬ。

自治心の涵養

本教が立教せられて、既でに百年近くの星霜を經てゐる。教會は壹萬に近く、信徒は七百萬と稱せられてゐるが、未だ確實な基礎が、各教會に樹立されてゐない樣である。如何なる社會的の變化が生じても、動搖せぬだけの根底を固めるのが、立教百年の期日を迎へる、重大要件では無からうか。

此の當面の事業を、眞面目に且つ確實に遂行するには、其の先行條件として、自治的精神を涵養する必要がある。何故なら自治の觀念なくして、堅固なる基礎を造らんとするのは柱なしに家屋を建てるのと、同樣の失敗を招かねばならぬからである。

然し視點を異にする人は、自治の觀念は、神に對する信頼と矛盾するから、教義上肯定すべきもので無いと、反對するかも知れない。吾人も此の點は考慮すべき、信仰上の問題があるのを認める、然し純理と實際とには、一致し兼ねる間隙がある、教會制度が存する以上、純理のみで取扱はれぬ場合がある。

殊に議論は別として、神意は人間の自治的向上を欲せられてゐるのでは無からうか。人間の親が我が子の獨立し、自活するを望むが如く、人間の成人を待ち兼ね給ふ御心は、全く自治的精神の發達を、期待してをられるのである、此の眞意に思ひ及べば、誰れしも自治的向上を、期さねばならぬと思ふ。

本部創立の年限から押しても、之れ又た既でに四十餘年を經過してゐる。然るに今尙ほ親の指導に依らねば、一歩も進めない樣な低腦では、確乎たる基礎は造れない。指圖を從順守つて行くのは結構であるが、性根を失つてしもうのは、決して神意に添ふ所以ではない、眞に、親の心使ひを休める爲めには、自治を完全に行ふより途はない。

實際問題としても、內容の充實が叫ばれてゐるが、是れは自治的精神を涵養することに依つて、充分な効果が生じるのである、自治が行はれぬやうな敎會で、發達してゐる敎會はない。吾人は各敎會が、如何なる場合にも動搖せぬ、大きい强い基礎を樹立する爲めに、自治的精神の涵養を、此の際力說せざるを得ないのである。

地方大會

青年會が創立せられたのは、大正七年であるから、今年は丁度十年目に相當するので、來る十月記念總會を開催するのみならず、十年を永遠に記念する意味に於いて、各府縣に於いて大會を催すとのことである。

青年會が過去十年間に、本敎の羽翼として活動したことは今更ら改めて語るの要はない。唯吾人が青年會に對して、深き注意を拂ひつゝあつたのは、あまりに急激な活動の結果、殆んど行詰つてゐる現狀を、如何に轉換して展面を一新するかの點にあつた。

然るに俄然十年の記念とし、地方大會を標榜して、本敎の內外に新氣運を捲き起こし、疲勞せる信仰を一新せんと企圖せるは、青年會の使命より觀て、寔に時宜に適し意義ある試みと云はねばならぬ。

殊に青年會が數年以前より、宣傳し實行し來つた海外布敎が、獨立二十年の記念として、具體的方針が決定され、發表されるのと立合ふて、此の新運動に着手されるは、獨り青年會とし

て意義あるばかりでなく、本教の上よりするも重大なる意義を持つものである。

聞く所によると來る十月には、先づ東京、大阪、京都の三大都市にて、盛大なる大會を開催し、先づ大會氣分を濃厚にして、十月末の總會を終へ、日本全土を三區分して、年内に各縣の大會を完うする豫定だと云ふことである。

此の大會の結果が、本教に如何なる刺戟を與へるか、容易に判斷し難きも、確かに新しい氣分と、本教の前途に對する、何等かの暗示を與へるに相違ない。何故なら青年會の過去に於ける活動は、殆んど對内的であり、系統的であつたのが、今回は多少對外的であり、非系統的であるから、注目せられるに相違ないからである。

吾人は以上の意義に於いて、青年會の此の壯擧を深く賛同するものであるが、十年の記念のみならず、毎年此の大會を連續して、地方的にも意義あらしめる必要を感ずるのである。然し早晩其の時の來るべきを信ずるが故に、敢て語るの要はないが、識者の一考を乞ひたいと思ふ。

内省の時

最近の本教が沈滞せるは、何人も認る事實であるが、其の然る理由を求むるに至つて、或る者は四十年祭後の疲勞であると云ひ、或る者は社會の不況に影響せられたからだと云ふ。何れも現實的な説明としては、決して間違つてゐるとは云へぬ。

然し斯くの如き説明が、神を信ずる者に滿足を與へ得るであらうか。事實は事實として説明するだけで安心が與へられるならば、信仰は結局無意義である。事實の奥を探り、現象の裏に徹して、神意の奈邊に在るやを、明確に感得し、是れを説明することに依つて、始めて宗教的理解を與へたと云ひ得るのである。

然らば本教の現勢は、如何なる神意に基いて、斯く沈滞して來たのであるか。本教の發展を望ませ給ふ神が、何故教勢の萎靡を齎らされたのであるか。想ふに是れは教徒に對し、静かに反省の時を與へられたのである。

實際に是れを調するも、四十年祭に對する活動は、豫想外に激甚であつたゞけ教師と云はず

教會と云はず、何等の教養も何等の布教もなさずして、教師となり教會を組織したのである。從つて教師自身の信仰も確立せず、教會も孤立するの有樣である。斯くの如くにして本教の現勢は漸次萎縮するに至つたのである。

此の際若し教師が强き信仰を得、生命ある教理を說き始めんか、教會は直ちに蘇生し、教勢の發展速やかなるは明らかである。然かも其の强き信仰と生命ある教理は、深き内省の眼を開きたる者でなければ得られぬのであるから、其の機會を與へる爲めに、此の反省の節を現はされたのである。

從つて此の節に際し、經濟問題で信仰を失つたり、猥りに神意を疑ふて、其の歸趨を過つが如きことがあつては、折角の神意を無意義ならしむるのみならず、自己の前途を抛つものであるから、環境に支配される心を切斷して、内省の眼を强く開き、自己本然の姿を見出さねばならぬ。强き信仰と生命ある教理は、此の一義で自覺することに依つて生れ出づるので、本教の將來は此の自覺者の活動より來るのである。

世界人

教祖が種々な迫害に出合はれたのは、教祖が人間としての正しい道を教へられたからであるが、人間としての正しい道は、總ての人種又は民族を貫いて、正しい道でなければならぬのであるから、教祖の道は人間の道であると同時に、世界道でなければならず、教祖は當然世界人であらせらるべき筈である。

教祖の遺書を拜讀しても、隨所に教祖が世界人の自覺の上に立つて、人間の道を教へておられるのを發見することが出來る、然るに從來の教徒は、教理そのものに從ふべきを念として、教祖の思想を探求するに至らなかつた。從つて教祖の世界人としての自覺をも、認知することが出來なかつたのである。

故に教祖の尊い所以を論ずるにしても、東洋道德をもつて之れに臨んだり、國家的思想から批判せんと欲したので、全き教祖の思想を掬むことが出來なかつたのである。今後は世界人として教祖を取扱はねば、眞に教祖の偉大性は領得出來なからうと思ふ。

殊に本教現在の立場から考へると、一層其の必要が感ぜられる。何故なら本教當面の問題たる、海外布教を行ふのには本教徒が何よりも先づ、世界人たる自覺を持たなければならぬから、此の方面の思想を明らかにすることは、やがて教徒の自覺を促す所以となる。

海外布教に對する、方針や組織が如何に完全されると雖も其の仕事に從事する布教者に、世界的の自覺が無かつたならば、失敗は火を睹るより明らかである。故に海外布教の先決問題として、世界人の自覺を私しは本教徒に要求したいのである。

教理的根據の上に立つて考へても、總ての守護は其の精神の決定に基くのであるから、海外布教と云ふ此の大事業の根本基礎たる精神が、從來の儘であつては海外布教に相應しい守護が現るべき筈がない。

小さい日本の國から。大きい海外に飛び出すには、小さい心を捨てゝ、大きい心にならねばならぬ。此の意味に於て教祖が然りし如く、本教徒も然るが爲めに、世界人の自覺を持たねばならぬ、是れこそ本教刻下の急務である。

疾病救濟

理論的な宗教論から云へば、疾病救濟の如きは、尊重するに足らぬものであるかも知れない、精神的な救濟の方が、遙かに高等な進歩したる宗教だと、實際多くの人に思はれてゐる。

然し議論が必らずしも事實と合致せないやうに、精神的苦痛よりも肉體的苦痛の方が、切實深刻であるだけ疾病の救濟を望む念願は、強くして且つ急である。是の疾病救濟を輕んずるは、昔しの武士が金錢を輕視したのと同じで、何等根據の無き感情に過ぎない。

本教は立教以來、疾病救濟を以つて一貫し、殆んど他を顧みなかつた。それが爲めに種々の誤解や迫害を蒙つたが、却つて本教は其の力を增し勢を加へて、現在の隆盛を見るに至つたのである。

今後の本教は布教宣傳に付いて、恐らく種々な方法を講ぜられるであらうが、若し方法や手段にのみ墮して、病氣救助の根本義を、多少にても輕んずるならば、それだけ本教の實力が薄弱化されるのである。

青年會總會の訓話に於いて、松村教正が此の點を力說せられたのは、海外布教を目前に控へたる本教の一弱點を指摘せられたものである。何故なら內地に於いてさへ布教の出來ない者に、海外に出て布教の出來る筈がないからである。

然し斯くの如き弱點が、本教に內在するに至つたのは、其の依つて來たる所はあるが、大體から云へば、あまりに世俗に流れ過ぎたからである。今少し時流を拔いて毅然とした所があつても然るべきだこ思ふ。

疾病救濟の實を擧げるには、自己の信ずる所は一歩も枉げないだけの信念が無ければならぬ、徒らに俗習に媚びる者の布教に落伍するものは、何れも是の信念が樹立されてゐないからである。

故に全き神の道具として、今後本教に殉ぜんとする者は、先づ信念を堅めて疾病救濟に從事し、其の體驗を基礎として活動せなければ無意義である。又是れが眞に本教を偉大ならしめる根本理であると信ずる。

獨立貳拾年

本教が一派獨立の許可を得たのは、要するに本教が國家的基礎の上に立つたので、爾來二十年の星霜は、國家的に種々なる變遷があつた樣に、本教にも幾多の變化が相次いで起つた。

其の歷史的過程は尙ほ記憶に新たなる所であるから、此所に叙說するの要はないが、是れを大局の上より觀れば、漸次向上發展したのは事實である。二十年前の本教と現在の本教とを對比して、誰れか今昔の感に打たれぬ者があらうか。

獨立二十年を記念すべき今日、本教の大勢が海外傳道に傾き、其の根本方針が決定し、近く發表せられんとするのは、國家的立場にあつた本教が、一躍して世界的地位を獲得せんとする第一聲ではないか。斯く觀ずる時、獨立二十年は將來の本教には重大なる意義を持つのである。

今後海外傳道が如何なる曲折の道を迂つて、如何なる發展をするか、容易に斷じ難い所であるが、教祖の豫言にして誤りなくば、着々其の効果の擧がり來るべきは信じて疑はぬ所であるが、神意を遂行する勇氣と自覺がなくては徒らに、時旬を後らすのみである。

本部に於いて發表せられる方針も、要するに規程に依つて支配せられるのであるから、其の規程を意義附け効果あらしむるには、人の力に俟たねばならぬのである。故に此の二十年の獨立を機會として、海外に傳道の手を伸べてこそ、實際に意義が生じる譯である。

二十年の記念の祭典は恐らく大祭に準ずる盛儀であらうが、是れは僅かに一日に過ぎない。一日の祭典も無意義では無論ないが、更らに精神的な永續性のある海外傳道がからむことに依つて、幾層倍の價値が生じるかも知れないのである。

獨立の爲めに苦闘せられた先輩の苦心を、玆に改めて感謝すると共に、其の精神を體して、本教今後の發展を意圖し、二十年を記念として、世界的に本教を進出せしむる爲めに努力するのが、後輩の採るべき道であり、神明負荷の使命を全うする所以だと思ふ。

神殿布教

獨立二十年を記念として、本部神前に於て取次を開始せられる旨、十一月廿七日午後開催された、教館の記念講演で、松村先生から發表され、翌二十八日より實行される事になつた。

此の神前取次は、事實としては決して大きい出來事ではないが、其の影響する所こ、依つて來たる源泉とを思考したらば、廣く且つ深きに驚かざるを得ざると共に、確かに今後の本教に、一大變化を與へる。劃期的の現象であることが思はれるのである。

由來お地場は教祖時代に於ては、助けの場所として、強き意義を持つてゐたこ共に、世の元こしての尊嚴を維持してゐたのである。然るに教會制度が設けられて以來、教權の中心としては、價値付けられておつたが、助けの場所たる本來の意義は埋沒されて、恰も世界普通にある參り場所こ、何等撰ぶ所が無かつたのである。

此の弊風はお地場ばかりでなく、各教會にも及ぼして、分教會以上の教會に於ては、殆んど布教を實際に行はず、事務のみを取扱ふて、能事終れるが如く考へて、大きい神殿を小供の遊

び場所として顧みない狀態であつた。一年二回か三回の祭典の爲めに、大建築をするのは、神殿建築の本義ではない。多くの信徒や未信者を集めて、布教をする必要からでなくては、折角の建築も無意義である。然かも今日まで、それを當然の如く考へて來たのは、あまりに間違ひ過ぎてゐた樣にも思はれる。

然し一面から云へば、時代が之れを許さなかつたのにも起因する。現在の本教としては何等の遠慮もなく、神殿に於て布教出來るが、或る時代には殆んど許されなかつた事があつた。故に信仰の衰退が然らしめたのではなく、社會的事情から止むなくなつたのであるから、教會本部に於いて、立教當初の精神に立脚し、敢然として地場の眞義を發揮し、神殿布教を開始せられたならば、必らず布教氣分が本教に横溢するに至ることは明らかである。

同時に本教は是の神殿布教を中軸として、一大廻轉をなし、新しい方面に向つて、新しい熱と力を以つて、前進するであらうことを、豫期し且つ希望するものである。

昭和貳年を送る

昭和二年も本號を以て、過去の海に送らねばならぬ。今年は再び其の姿を、我々の前には現はさぬ。最後の此の瞬間に於いて、今年を靜かに顧ることは、來るべき新年に對する、用意深き者の當然の回顧ではないか。

本年に於ける本教を通觀して、大體に於いて感ぜられる點は、將に新しき方面に動き出さんとする傾向の、著しいことである。一陽來復して萬朶の花が開かんとするを待つ、新春初頭の感じこそ、本年の本教を髣髴せしむるものである。

事實に付いて檢しても、本年の春季に行はれた講習會は、結果から云へば充分の成功ではなかつたが、本教に與へた刺戟は深大なものであつた。恐らく本教の發展の中には、此の影響が必らず織り込まれて行くに相違ない。此の意味から云へば一時的には、割合に効果はなかつたが、長い時間の上には、深い足跡を印したことが現れるであらう。

次には海外視察である。一つは滿鮮管理所主催の下に、本社が後援して行つた視察團と、一

つは外國語學校が、修學旅行として行つた、東洋各地の見學旅行である。從來の本教としては、何れも新しい試みであつただけ、其の結果を案ぜられたが、相當の收穫を持つて歸つた。今後の海外布教に對して、如何に是の旅行が役立つかは、改めて語るの要はない。既でに雜誌や刊行物に其の旅行記が掲載されて、讀者に深い感銘を與へたゞけでも、海外布教の氣分を濃厚にしてゐる。

十月に入つて青年會が創立十年の記念として、地方大會を企圖し、各縣に於いて大會を開催したことは、本教史に特書さるべき出來事であつた。是れが爲めに本教が、對外的に收めた効果は、蓋し想像以上である。各地の新聞が社會的に進出し來たれる天理教として、眞面目に爭つて、其の記事を掲げたのに依つても、其の盛況が裏書される。

それから十一月の獨立二十年を記念として、二つの出來事があつた。其の一つは海外傳道の規程が制定されたことである。海外布教の聲は隨分高かつたが、本教としては何等具體的のものがなかつた。然るに職制を改正して、海外傳道部を設け、傳道規程が出來たのは、海外傳道の直接準備であつて、遠からず其の局に當る者の任命がある筈である。

今一つは神殿に於ける布教である。神前奉仕から、神靈中心の思想が高調せられ、神殿の御助けになつたのは、當然の歸結であるが、開始以來未だ日の淺いのに、人々が參集して來るのは、如何に人々が之れを期待しておつたかが分る。又た地場が助けの場所たる意義を、斯くして初めて發揮されるのであるから、何人こ雖も共鳴せずにゐられぬ筈である。

以上の種々なる然かも新しき出來事は、何れも其の成果を今後に待たねばならぬものばかりである。是れ本教が將來に對する準備の年であるとする理由であつて、來るべき昭和三年は、是れを育て養ふべき年ではなからうか。斯く感じ斯く豫想しつゝ、茲に昭和二年を送る。

巣鴨の眼

余の心

私しが支廳長になつてから、最早や一年半は過ぎてしまつたが、顧みた所何ものも殘つてゐない、勿論殘らうが殘るまいが、そんなことは如何でも良いのであるが、本教全體が少しでも、好調に向つてをつたならば、それで澤山なのである。

平たく實際のことを云へば、未だ私しには管内の樣子が、はつきり寫つて來ないのである、殊に震災前の東京ならば、それでも幾分か、想像することも出來たのであるが、震災後の教會の實狀が如何なつてゐるのか、殆んど混亂してしまつた樣で、見當さへも付かぬのである。

それで先づ何よりも、一般的な教會復興を問題として、それに力を注いでゐるのであるが。何分實際の勢力があるのか如何か、それが判然としてゐないので、今一歩踏み込んで行くことが教會の爲めになるか如何か、或は教會を苦しませる樣なことは無からうか、斯うした考へが湧いて來るので、つい思ひ切つた方法も採れないのである。

是れが支廳の爲めであるとか、本部の御用でゞもあれば、相當に思ひ切つた方法によつても、

其所に信仰が伴ふから、安心して懸れるのであるが、何んと云つても教會ばかりでなく、其の信徒も共に災難に出合ふてゐるのであるから、今日では震災後三年半の歳月は經過したこは云へ、未だ充分に回復したこは云へない、從つて無理な方針を採らせることは、教會を向上せしめるよりも、時には教會を困難に導かぬとも限らぬから、自然何事も躊躇するやうになる。

加ふるに最近の財界の混亂は、一層教會の維持を困難ならしめたに相違ない。目下其の影響は少ないかも知れぬが、日を追つて次第に濃厚になるであらう。

斯う思ふて來るこ教會の復興も、特別な神樣の御守護が無い限りは、困難だこ思はねばならない。其のかはりに此の困難なる中を切り拔けて、進んで教會復興を斷行する者には、私しは必らず神の特寵があるこ信ずるので、左樣した人が續々現れるのを、私しは心から持つものである。

三才寮

三才寮の學生から、如何せいこか斯うせいこか、種々の注文が出るらしいのであるが、左樣云ふ通りにも出來ないので、其の儘に捨て置くことがある、世界の學生なら、斯んな時に腹を立てゝ、悪いいたづらを始めるのであるが、其所はお道の學生だけに、仕方が無いこ諦めてゐるらしい。

斯う云ふこ三才寮の學生は、至極素直な學生の樣に聞こえるのであるが、其の實は中々左樣でもないらしい、私しは未だ一度も行つて見たことはないが、部屋などは實に亂暴を極めたものだこ云ふことである。學生の間は部屋の掃除など、眞面目にする氣持になれないのは私達も經驗のあるこだから、是れが悪るいこは決して云はない。

けれども割合に勉强せないこ云ふ非難は、あまり結構な非難ではない、それは將來お道をやるのであつて學者になるこ云ふのでないから、眞劍に勉强する必要がないこ云へば、それも一理屈の樣に聞こえるが、然し將來は如何あらうこも、學問をする爲めに上京し、又親も其の

心で手離してゐるのであるから、兎に角眞面目に勉強することは、自分の爲めになるのであるから、人から云はれなくとも、自分から進んで勉強せなければならぬ筈のものだと思ふ。

それには今の寮では不適當だと云ふ話も聞く、成る程震災で少し傾いた所もあり、光線の取り方なども充分でない樣である、と云つて今更改める譯にも行かない、暫く辛棒して建替の出來る時を、待つて貰ふより外はない。

私しの理想から云へば、三才寮は支廳から離れて、誰れか本部からでも相當の監督者を置いて、取締つて行く樣にせなければ、完全に學生を育てることが出來ないと思つてゐる。それで其の計畫も立てゝみたのであるが、思ふ通りに進捗せず、遂ひに其の儘になつたのである。今では三才寮が何處に所屬するのであるか、それさへ確かならない有樣である。だから時の來るまで、暫らく待つてみるより仕方がない。

主事の巡教

昨年管内教會を主事に巡教せしめた所、案外其の成績が好かつたのと、昨年約束して置いた事もあるから同一主事をして、同一の方面を巡教さして貰ひたいこの、最もな要求もあつたので、要求通り主事の巡教を開始したのである。

昨年は何しろ初めのことであり、主事の意見も一致を缺いてゐた點もあつて、其の報告に依ると、隨分等差が出來てをつたが、兎に角其の報告に基いて、成績の好くない教會は、其の最上級教會に通知して、至急整理せられるやうに依賴して置いたのであるが、其の結果は如何なつてゐるか、今度の巡教で分る譯である。

又た昨年主事この間に、約束せられてある事が、其の場だけの申譯であつたか、眞實其の心で約束したのであるか、同一の主事が巡教して行くのであるから、直ちに分る道理である、恐らく道の人である以上、約束を無視するやうな人は無からうと思ふが、是れも今度の巡教に依つて判然すのである。

巡教する主事から云へば、多い人になると六七十ケ所も廻らねばならぬのであるから、隨分大儀なことに相違ないが、然し斯うして丹精せられるのが、どれだけ大きい道の理になるかも分らぬのである。又實際から云つても、他教會の狀態を、實地に臨んで見て來ることは、尠からず參考になるに違ひないから、それだけ得る所がある筈である。

出來るならば暫らくの間、毎年主事に御迷惑でも、此の巡教を續けて貰ひたいと思つてゐる。教會が多忙で左樣出歩るくことが出來なければ、二年に一度ぐらゐづゝ、巡教して貰つたら、管内の教會がどれだけ力附いて來るかも知れない、殊に上級教會が遠方にあつて、修理をして貰へない教會などは、是れで生れ變つたやうな氣持になるであらう。

今年の結果が如何現れて來るか、私しはそれを見てから、改めて主事に相談して、前に云つたやうな方法を採りたいと思ふてゐる、恐らく主事も不同意せられる樣な事は無からうと思ふ。

統一ある活動

先帝陛下の御大喪が行はれた時、本教の教師が正服若しくば狩衣を着して、信濃町停留場の近傍に於いて御奉送申し上げた事は、既でに御承知のことだと思ふ。

此の日私しは御分家の奥樣を案内して、赤坂警察署の前で、御葬儀を奉拜したので、本教々師の樣子が如何であつたか、事實を知ることが出來なかつた。

けれども先帝が葉山から御還幸の時には、赤坂警察署の筋向ふが、本教々師の參列所であつたから、管長と共に其の場に臨んだ樣子から押して、大體の見當ぐらゐはつけることが出來る。

然し其の場に臨んで、監督の任に當つた主事から聞くと、他の教派では隨分不統一な服裝をして居たのに、本教の教師が全部一定の服裝であつたのは、強く人眼を引いたと云ふことである。

服裝に依つて人眼を引くこと云ふことは、決して惡るいことではないが、然しあまり稱すべきことでもない、唯場合が場合であるから、是れも仕方がないけれども、兎に角統一ある活動が

如何に強いものであるかと云ふことが、此の一事に依つても明らかに認められる。

惟ふに今後は本教も對社會的に、種々なる問題が起つて來るのであらう、特に東京に於いては、一層甚だしいものがあるであらう、其の間に處して行かなければならぬ、東京に於ける我が教徒は、何事にも統一ある活動の力を以つて、處して行かなければならぬ。

それは今回の御大喪に服裝の一定した如く、本教全體の教師の心が一定して、物に觸れ事に當つて行くより外はないので、唯此の統一ある活動の力が、本教の最も強味とする所である。

講演の擇喰

東京に在住する本教の人々は、環境が然らしむるからでもあらうが、他の地方の人々に較べて、講演を聞くことが熱心でもあれば、又た甚だ上手でもある。

初めて青年會が出來た時、私しは東京で七ヶ所程講演して廻つたが、熱心な人は七ヶ所とも附いて廻つてゐた。私しは其の時全く驚いたのである。同時に講演に對する種々なる批評を聞されて、甚だ聞き上手であることも、知るを得たのである。

それで東京の人々は、誰れの講演にも、斯うした熱心と批判的な態度で、聽講するのであらうとのみ、私しは信じ切つてゐたのである、所が東京へ來て聞き手の間に這入つてみると、私しの思つてゐたのは、大間違であつたことが分つた。

成る程聞き上手であることも、熱心に聞くことも、私の信じてゐた通りであるが、それは或る限られたる人々に對する熱心であつて、誰れの講演にも通用せないもので、是れを一口に云へば、講演を擇喰するのである。

一面から云へば斯うした事は自然で、自分の胸を強く打つものがあり、心に得心が出來るから、聞く氣になるのであつて、何んの事だか理解の出來ない、愚にも附かぬ話は聞く氣になれないと云ふのは、洵に止むを得ない譯だとも云へる。

然し他の講演と違つて、本教の講演は講演そのものを、聞くのみではなくして、講演者その人の口から流される言葉以外に、其の人の理を聞くのであるから、決して批判的な態度で臨むべきではない。

理と云ふものは率直に受け入れる所に、水の樣に流れて行くのであるから、今後は理を受ける心持で、誰れの講演でも一樣の心を持つて決して擇喰をすべきではない、是れは自ら得る所を失うものである。

天理講座

日本大學内に天理教青年會が、神道青年會から分離して創立されるに付いて、岩井君から諒解を求めて來たことがある。學校内で行はれることであるから、別段干渉する必要もなかつたので、唯話しを聞くだけに止めて置いた。

其の後懇談會か座談會の樣なものを、青年會に於いて開催したいと思ふから、出席して呉れとの依頼もあつたが、都合が附かなかつたので、是れも其の儘になつてゐる。

昨年の暮であつたか、本年の初めであつたか、はつきり覺えて居ないが、岩井君と日本大學の學務の主任をしてゐる推名君とが、お地場へ參拜して來て、私しの宅を訪問して呉れた、勿論其の以前からも岩井君が話してゐたのであるが、其の席上で日本大學内に、天理講座を設けては如何かと云ふ話が出た。

推名君は是非學長の諒解を得て、天理教の講座を新設したいと思ふから、講師を推選して貰ひたいと云ひ出した。然し突然のことであるから、私しも返事に困つて、何れ考へて置くと云

ふことで其の時はお別れした。

所が十日程前に岩井君が、推名君の使としてやつて來た、そして學長の諒解も得たから、講師になる者を是非推選して貰ひたい、左樣なれば四月から開催すると云ふのである。

私しは種々考へたが適當な人が見當らない、それで止むなく今度敎校の講師を辭して歸つた白鳥氏は、相當勉强家でもあり、割合新しい考へを持つてゐるから、同氏を推選することにして置いた。

本人が承諾するか如何か分らぬが、先づ斯うした經過から日本大學内に天理講座を設けられることになつた、私しは同講座が年と共に、確實なる基礎を造つて行くことを、心から祈つてゐる。

支廳の利用

敎務支廳の意義に付ては、種々議論があるけれども、四五の支廳を除いたら、實際一ヶ年に其の必要が、數へる程より無いのである、然るに相當立派な建物が、建築せられて居るのは、多少疑問に感ぜられぬこともないが、既でに建築せられてゐるものを、今更ら問題にしてみた所で、喧嘩過ぎての棒ちぎりであるから、何事も言ひ出す必要はないのである。

然し今日迄で不必要であつたからとて、將來も不必要であると、捨て置くのは甚だ能の無い仕方である。支廳の意義が如何あらうとも、其の建物を有用に使用するのは、決して惡るいことではない。況んやそれが本敎の爲めになる場合は、支廳としても其の建物を解放し、管内敎會に於ても、大いに利用すべきである。

殊に東京の支廳などは、震災後未だ敎會の建物が、復興されてゐないので、何れの敎會でも隨分狹隘を感じてゐる、同一系統の敎會の人々を、一堂に集めて修理する時など、殊に不自由を忍んでゐる樣である。左樣云ふ場合に、支廳の建物を是れに當てるのは、甚だ有意義な使ひ

方であると思ふ、之れを信徒の方から考へても、狹い所で究屈な思ひをするよりも、支廳へ集る方が、少しの不便を忍びさへすれば、氣持よく仕込みを受けることが出來る譯である。

斯うした考へを以前から、私しは持つてゐたのであるが、其の時が來なかつたので、言ひ出さずに居たのであつた。故に或る教會が、支廳の借用を願つて來た時に、私しは喜んで支廳の建物を提供した。又今回一筋會の人々にも、會場として支廳の使用を承諾した。是れ皆右の理由に基くのである。

今後上級教會の遠い所にある教會や布教者が、會合の場所として借用を申し込まれる場合、支廳は差支の無い限り、便宜を計りたいと思ふてゐるのであるから、遠慮なく使用せられたならば、相互の爲めになることだらうと思ふ。

復興か積德か

昨年の四月に帝大に入學されるので、管長が上京されてからもう一年近くになる、考へて見ると、管長の御在京と云ふことは、勉强の爲めであると云へば別段何んでもない出來事であるけれども、お道の者としては、今少し考慮すべき必要が無からうか。

無論これは個人の取り樣と、悟り方に依つて相違があるのは止むを得ない譯であるが、管長は一面學生であらせられると共に、一面本教の眞柱として、重大なる神よりの使命を帶びて居られるのである。現實に於ける在京の理由が、如何であらうとも、眞柱在京の事實は、帝都に於ける本教徒には、深い意義がなくてはならぬ筈である。

想起すれば前管長が、本部長となられたのは、東京に於いてゞあつた、其の當時日本橋や東が今日の隆盛を觀る理を造つたのである、其の當時と現在とは、本教の教勢も變つておれば、世界の事情も變化してゐるが、理には決して變りはないのである。故に此の時に東京の人々が理を積まねば、再び斯うした機會は得られないだらうと思ふ。

然し一方東京に於ける、各教會を大觀するのに、震災の影響を受けて、何れも苦しい歩みを續けてゐる。甚だしきは我が教會の維持にさへ、苦勞してゐるこ云ふ狀態であるから、進んで理を造らうこ考へる暇も無いやうである。私しは是の點を實は衷心から悲しんでゐるのである

從つて私しは如何に好機會であるからと云ふて、無理に理を造れとは云はない、それは各人の心次第に任せるより外はないのであるが、若し現在が理を造る時であるこを知つて、進んで徳を積うこ云ふ人があれば、甚だ結構な譯である。

然し思へば神樣も皮肉である。眼の前に教會の復興を置き、其の後に理を積む目當を置き、何れを撰ぶべきか、自由の意志に任せて見ておらるゝのである、東京の教會は是れは一つ、眞面目に考へてみなくてはならぬ問題ではなからうか。

教會の助合

お道の者は知らぬ他人でも、病氣で苦しんでゐれば、探してゞも助けに行く程、眞實の心に充たされてゐるのであるから、同じお道の教會が、事情で行き惱んでゐる時は、互ひに助け合ふて行かねばならぬここは、千も承知萬も合點してゐる筈であるのに、實際になるこ中々左樣は行かない。

そればかりでなく私しの最も遺憾に思ふのは、他の教會が盛んになれば、それを羨やんだり嫉んだりして、甚だしいのになれば、蔭から邪魔をするものさへある。是れは人間こしての弱點だこ云つてしまへば、それまでゞあるけれども、お道を聞かぬ者なら兎に角、人に教を說いてゐる者こしては、斷じて許されぬ心使ひである。

然し左樣した無理な心使ひをする者は、極く少數であるが、他の教會に對して、傍觀的な態度を採つて、助け合はない者は澤山あるやうである。然しお道全體から考へると、どの教會が衰へてゐても、それはやがて本教全體の上に、多少とも影響して來るのであるから、笑つて見

てゐるやうな消極的な心持を出さずに、今日は人の身、明日は我が身と云ふこともあるのであるから出來得るだけは、助けて行かなければならない。

此の點に付いては、同一系統の教會は割合に、助け合はない迄も、親しみがあるやうである。然し中には又た、同一系統であるが故に、却つて互ひに精神的軋轢をして居るものもある。是れなどは互ひに反目するだけ、お道に熱心であるに相違ないが、反感を持つことは決して好いことではない。だから出來るだけ心を打ち解けて、小さく云へば同一系統の教會、大きく云へばお道全體が、親し味を持つて助け合ふて行かなければ、道を榮へさしてゐるのやら、道を衰へさしてゐるのやら、分らぬことになるのであるから、人を助けるだけの眞實があれば、教會相互に助け合ふだけの、大きい廣い心を持つて、道の榮へを樂しんで貰ひたいと、私しは心から望むのである。

實力の時代

本教も教祖歸幽後四十年を經過した。此の間に組織の上にも思想の上にも信仰の上にも隨分變遷があつた。此の變遷が本教弘通に利する所があつたか如何かは、後代の人々に依つて批判せらるゝであらうが、大局より觀る時は消極的であり、妥協的であつたことは否まれぬ。

消極的であり妥協的であるのは、惡るいと云ふ意味では更にない。時世時節に依つて如何なる方針も採らねばならぬから、或る時期にはそれが最上の途であつた場合もあらう。然し現代は最早や左樣云ふ嬰退的な考から脱して、積極的に進むべき時ではなからうか。

何故なら本教が社會から甚だしき誤解を受けてゐるとか、當局から特に惡意な注意をされてゐるとか云ふ時なら、自重もし愼重な態度も採らなければならぬが、其の頃と違つて、本教の眞價が漸次認められつゝある今日、何を遠慮して躊躇する所があらう。

殊に最近は獨り宗教ばかりでなく、社會の各方面に於いても實力がなければならぬ時代になつて來てゐるのである。實力なき者は當然社會から落伍する運命を負ふのであるから、本教

も茲に目醒めて、進取的に發展して行かねばならぬ。

況んや近く行はるゝ普通選擧の結果が、如何なる方面に如何なる變化が起つて、本敎の前途を不安ならしむるかも知れない。其の時徒らに内容なき空言に自らを僞瞞して置いたら、實力の試練に出會ふて驚愕せなければならぬから、今にして實力の涵養を忘れてはなるまいと思ふ。

震災の餘弊

震災以前までは、東京支廳管内の敎會は、支廳を中心として割合に良く統一されて居た、從つて敎會もあまり見劣りするものが少なかつたと云ふことである。

所が震災で丸燒になつた敎會もあれば、信徒の大半を失つた敎會も出來たのに加へて、其の後敎會の倍加運動で、敎會が激增した結果、秩序立つて進んで來たのが、突然其の調子を亂してしまつた。

昨年の秋敎友會が組織せられて、多少此の亂雜を整調せられた樣ではあるが、未だ其の弊風は一掃されてゐない、從つて支廳に對する考へなども區々であつて、少しも統一されてゐない樣である。

此の事は本年の夏、主事が各敎會を巡敎した、其の報告に依つても明らかなことであるが、其の中で私しの最も遺憾に思ふたのは、一方から云へば、大いに酌むに價する事情もあるのであるが、理を立てると云ふ考へが薄くなつたことである。例へば敎會の移轉や所長死亡の場合

など、直ちに本部の認可を得なければならぬのに、勝手に移轉をしたり、所長が死亡しても其の儘に何ケ月も捨て置くなどする教會がある。

支廳では出來得るだけ注意はしてゐるが、震災の當時止むない場合として、特別に取扱つたのを、今尙ほ當然であるが如く感違ひして、其の弊風を改めないものがある。是れでは道の立つ理がないのであるから、今後は運ぶべき理は直ちに運び、立てるべき理は直ちに立てゝ、義理や情實を賴るが如き、不心得をせぬ樣にせられたい。

一筋會

昨年の九月に東京へ來ることになつて、始めて一筋會のあつたことゝ、それが教友會の創立で廢されたと云ふことを聞いた。會の主旨は所長達が互ひに、御話の研究をするのであつたが惜しい事をしたとの風說であつた。

私しは元來熱心な布教者と會合して、純な信仰に徹した談話をするのが、何よりも好きであつたから、是れ迄でにも機會ある毎に、左樣した會合を試みて來たのである。布教の實驗談や不思議な靈救の實話は、心を淸めると共に、信仰心を向上せしめて呉れる。それで私しは教友會は教友會として、一筋會は一筋會として存續せしめたら良からうと話した。

其の後一筋會が如何なつてゐるか、改めて聞く折も無かつたので、一向に消息を聞かなかつたが、年末に上京したのを幸ひに、目下の樣子を谷岡氏に尋ねた。

所が谷岡氏も詳しい樣子は分らぬと云ふのである、それは一筋會が一定の場所で會合せないので、集合する人が少數に限定されてゐる結果であるらしい、私しは是れでは一筋會も、甚だ

無意味なものになりはせぬかと思ふ。

私しの希望を卒直に云へば上京して來る布教者の心を倒さぬ樣、倒れた者は起してやるやう、互ひに教理の研究もして、力のある團結の下に會合に制限をせず、如何なる人々をも、其の熱烈な信仰で同化する樣にして貰ひたい。隅の方で隱れたやうな事をしてゐて、どれだけの價値が見出されよう。私しは今少し堂々たる態度で、一筋會が活動せられんことを望む。

新興卷頭辭

發刊の辭

既成宗教の信仰と權威が、近代思想の猛勢に出會ふて、熱と力を漸次失ひ、存在の價値さへ疑問視されつゝあるは、あまりに傳統的思想に執着するが故か、信條乃至教義が近代人の生活に、深き交渉を有せざるが爲か、其の理由が如何なるにもせよ、年と共に人心を失ひつゝあるは、何人も等しく認むる所である。

然るに立教以來未だ一世紀に充たざる、天理教が創立されてより、全く迫害と誹謗の間に處して、殆んど驚異とすべき發展を示したのは、抑々何を意味するものであらうか、道途に喧傳さるが如き邪教なれば、既でに早やく消滅すべき筈であつた。何故なら鋭き近代人の批判は、實證的な見地から誤れる信仰乃至教義を、根抵より覆へし得たに相違ないからである。

けれども天理教は、隨分猛烈なる非難も、各方面からの批判も受けたが、信仰に何等の動搖を生ぜざるのみか、一難來る毎に勇躍して、信仰を向上せしめ教線を擴大して、現在の勢力を培養し來つた。千年二千年の長き歴史を有する、大宗教と比較すれば、未だ其の大を誇り其の

勢を語るに足らずとするも、日本に於ける新興宗教として、宗教より人心の離れつゝある時、近代思想が急激な變化をなす日本に於て、斷然頭角を現はせる天理教を、風説を信じて一笑の下に葬らんとするは、あまりに事實の價値を無視するものではないか。

是れは社會が近眼過ぎた結果でもあるが、天理教自體に於いても、堂々として其の信仰を披瀝し、教理を卒直に宣傳せなかつたにも由來する。誤解を恐るゝあまり、消極的態度で臨んだのが、却つて社會の誤解を深刻ならしめ、痛くない腹を剝ぐらるゝの愚を演じた譯である。

然し最早や天理教も消極的態度を捨てゝ、積極的態度を採るべき時に迫つてゐる。社會も唯徒らに非難を快とする、無理解な態度を捨てようとしてゐる。謎の如き天理教とは、果たして如何なる宗教か。眞面目に研究せむとする傾向が、著しく現はれて來た。是れは天理教の爲めにも社會の爲めにも、悦ばしき現象である。

然し兩者を繼ぐ仲介者が無かつたならば、誤解も解けず研究も不可能となる道理であるから、吾々は種々なる困難を排して、本誌の發行を斷行したのである。從がつて本誌の使命とする所は、天理教の情實に囚はれず、赤裸々の天理教を社會に紹介し、教義や教祖を眞面目に研究す

ると共に、教外者の忌憚なき批評を掲げ、以つて天理教の他山の石たらしめたいと思ふのである。

是の使命を吾々が遺憾なく遂行し得らるゝや否や、問題が大きいだけ容易に確信し得られないが、然し是れは獨り吾々のみの問題ではなく、社會の大きい問題でもあれば、天理教の爲めにも考慮すべき問題であるから、吾々の微意を諒とし、所期の目的を貫徹する爲めに、後援せられんことを希望する。

普選の時代

普選法實施の當然の歸結として、無產政黨の樹立は何等奇異の感を與へないが、此の政界に投ぜられた一石が、單んに政界の波紋たるに止まらず、年と共に日本文化の全面に渡つて、至大の影響を及ぼすべきは、想見するに難からざる所である。是の豫想を前提として、來るべき新時代を想像する時、何人と雖も心の緊張を覺ゆるに相違ない。

然し無產政黨の當面の敵たる、有產階級の人々は、無產政黨の創立及其の發展に對して、多大の恐怖を感ずるは、今更ら語るの要もないが、同じく普選法に依つて被選擧權を認められたる宗教の教師乃至僧侶が、此の政界に投じて如何なる態度を採るであらうか。

爾來宗教は何れも其の原始時代には、無產者の味方として民衆の間に生れ、貧困者の善良なる友として、有產者と戰ふたのであるが、民衆の間に勢力を得、有產者に成り上がると忽ち其の態度を更へて、善男善女の上に君臨する。そして無產者を顧みず、一向に有產者を背景とし踏臺ともして、殿堂の宗教を造り上げ、不精な安住の地とする。

其の傳統を享けた教師や僧侶が、被選擧權を得たからこて、狂喜して政界の渦中に投ずるのは時代の眞相に盲目であるばかりでなく、自己の立場さへ自覺せざる、痴者の誹を免れぬであらう。

何故なら時代は宗教に對して、有產か無產かと鋭い詰問をなしてゐる。其の問題を解決せずして、徒らに政界に飛び出しても、一時の快を貪るに過ぎないので、年と共に其の立場が板挾みになつて、苦悶するより他はあるまい。

それよりも先づ自己の立場を明らかにして、然る後に採るべき道に進むが順序である。卽ち宗教は無產の味方か敵か、味方ならば味方らしく、敵ならば敵らしく、其の事實を示して立ちあがるのが當然である。是れを度外視しては、努力しても足許が危險である。

何故なら來るべき時代は、何んと云つても民衆の時代である。民衆の信仰を無視して、教權や習慣では宗教の維持は困難になる。命令や强要は過去の遺物である。眞に目醒めたる者の時代は、やがて無產者の間から來るであらう。其の時宗教革命の聲が民衆に依つて叫ばれ、既成宗教の權威が地に墜ち、所屬の僧侶や教師は火山の上にあるが如きに至るであらう。

斯く觀ずる時、無產政黨の樹立は、宗敎として對岸の火災として、默過すべきものではない。此の投石に依つて深く時代の眞相を觀じ、今後の方針を確立すべきではなからうか。

無意義な宗法

日本の文化が明治大正の兩時代を經て、急足な發展を成し遂げたのは、洵に驚異な事實であるが、此の百事變化する渦中に在りながら、舊態を依然として改めず、尊古思想の奴隷である かの如く、傳統のみを墨守してゐる一團がある。是れを名付けて宗敎と云ふ。

宗敎本來の使命は如何なるにせよ、其の活動は必らず時代の先驅者として、民衆を指導するの地位にあらねばならぬ。然るに時代は遠慮なく進んで行くのに、時代に順應することさへ出來ず、徒らに寺院や敎會に蠢動するのは、將に社會的罪惡と觀るべきである。

然し僧侶乃至敎師が、斯くの如き生活を營みながら、何等自責の感を起さないのは、それを當然の如く觀ぜしむる、深き因由が無ければならぬ。其の病原を發見する爲めに檢討するのも無益ではなからう。

然し斯くの如き大きい問題は、單一なる理由に由つて構成されるものではない。長き歲月と種々なる關係から、無數の絲に依つて編み上げられてあるのであるから、輕卒に判斷すること

は許されない。然し其の根幹たるべきものは、複雜でも無ければ煩瑣でもない。割合ひに分り易いのである。

然らば何が其の因由となつてゐるのであるか。是れを一言にして云へば、宗教に對する政府の取扱が間違つて居るからである。政府は宗教の取扱を、今少し變更すべき必要がある。

信仰の自由を認める限り、行政官廳として是れ以上、教派内に立ち入る事も出來なければ、監督官廳として是れ以上、自由を認めることも出來ないこ、或は論ぜらるゝかも知れない。然し私しの云ふのは、管長に監督權を委任してゐる。是れが法治國こして變則である。此の變則がやがて百弊を生み出だす、病源をなすに至るのである。

如何なる理由に依つて、宗派内の監督權を管長に委任せられたのであるか、寡聞なる未だ聞くを得ないが、明治の初年陋習を改め得なかつた結果、宗教に對する特別の扱から規定せられたのではなからうか、若し此の推定の如くであれば、現在は最早や時代が變つてゐる。

今回宗教法案が制定されて、議會の協讃を得て實施されるに至るであらうが、其の法案も何等此の點には觸れないで從來の儘になつて居る。唯變つたのは管長に對する訴願權を認めた

點である。

然らば管長制度が、何故宗教の發展に弊害を釀成する因由こなるかの問題が起るのであるが、管長は信仰者でなく行政官である。信仰圈内に冷やかなる行政意識を注入することは、信仰の混亂を來たし、惹いて信仰を稀薄ならしむるに至るからである。

宗教の發展は行政意識では望めない。强烈なる信仰に依つてのみ、進展するのであるから、行政權の委任は全く宗教を理解せない者の、與へもし受けもしたのであつて兩者は截然別たるべきものである。

斯くなつて始めて宗教は其の本來の地位に立ち歸るこ共に、其の信仰を向上せしめて、時代を指導するの使命を、遂行し得らるゝに至るのである。故に私しは此の點を識者が今少し眞面目に熟慮せられん事を望むのである。

民衆の宗教

神を客觀の世界に在りとし、崇敬跪座したるは目醒めざる民族の信仰であつた。個性の意義を明瞭に自覺したる近代人の信仰は、神を客觀に認むるの愚を知り、認識する者自らの中に、神を自得するの當然なるを知つた。

露國の一文豪が神は民衆の中に在りと叫んだのは、驚嘆すべき靈聲ではないか、個性の集合體である民衆の間に、神が其の姿を現はしてこそ、人間生活と不離の關係にあるので、民衆を忘れたる神ありとせば、最早や近代に於いては其の必要がない。

神既に民衆の間に在りとせば、其の神の聲を傳ふべき者、亦民衆の間に現はれねばならぬ。個性の中に神を觀、其の不言の聲を聞き、民衆に神性の自覺を促す者は、谷底の中より現はるべきである。

法然と云ひ親鸞と云ひ、何れも比叡の高峯より降りて、何故俗里の間に其の法を述べしか、是れ皆な民衆の間にこそ、眞實の自覺が必要なるを認めたるが爲ではないか、然も其の門徒は

祖師の意を知らず、徒らに高踏的な宗團にしてしまつた。

神を殿堂裡に封じ、威儀を正して祭儀を行ひ、善男善女を盲動せしむる間に、新しき信仰は再び個性の裡に芽生へ、神性の自覺が新しき信仰を要求し、民衆の間に新興の宗教が樹立せられる。

明治維新の大變革は、人心を更新せしめ、舊來の文物を排擊したが、此の風潮は宗教界にも影響し、新興宗教の簇出を促した。然し民衆の心を把握し、一教確立の地位に達したものは、其の幾割かに過ぎなかつた。

明治大正の兩時代を通じて、急激に發展した文化に應じて、人心も亦急速なる變化を來たした。新興の宗教が此の目まぐるしき人心の變化に順應して、教勢を伸展せしむるには、あまりに不準備であつた。時の進むに從つて人心は是れを忘れ去つた。

新時代の人心を轉向して、神性を自覺せしむるには、又た新しき宗教が必要である。吾人は其の宗派の何たるを問はぬ。眞に個性の中に神を認め、民衆の間に神の聲を聞く底の、徹底味ある宗教を欲するのである。

民衆の宗教とは時代の要求ではないか、民衆が其の神を自覺したる時、如何に強い力を產み出すか、民衆の運動は神を背景とした時、其の高潮に達するのである。吾人は此の意味の宗教が現はるべきを豫想する。

日本の宗教

國家の存續が民族の安全を保證するものとして、亡國の悲慘なる生活を語られるを聞く時、何人か國家生活の幸福を悅び、之れを愛護するの念に燃えざる者があらうか。國家主義が最近の思想界に、强い影響を與へつゝあるは、洵に故なき傾向ではない。

然し亦他の一面より、國家生活が國民の自由を奪ひ、無產階級を壓迫する事實を語りつゝある時、四海同胞共存共榮の理想境を描き出されたならば、是れ亦何人も人道主義の傘下に走せ參ぜんことを希望するであらう。況んや近時の如く、階級意識が强められ、爭議が隨所に行はるゝに於いては、不識の間に其の渦中に捲き込まれる者もあるであらう。

今後此の二つの大きい潮流が、如何に交叉し如何に變化して、如何なる結果を招來すべきか、殆んど見當さへも付かぬのである。何事にも極端に走る國民こは異ひ、日本人は割合に淡白な國民性を持つてゐるから、幾年かの後には互ひに妥協點を見出して、圓滿なる解決を付けるかも知れない。然し其の間相當の曲折あるは、何んとしても否定の出來ない事實であらう。

此の思想の交流する時に際し、宗教が如何なる方針の下に其の使命を遂行すべきか、恐らく興味深き問題ではないか。若し舊來の如き傳統的なる思想に依り、社會を教化せんとしても、徒らに勞多くして實なかるべく、新思想を取入れて活動せんとせば、種々なる問題が蝟集し來るべく、其の處置に迷はねばならぬ。何れにしても現在に於ける宗教の地位は甚だ不安定である。

幾年かの後、豫想の如く思想が安定を得て來ることすれば、宗教も當然其の地位を安定に導くことが出來るが、然し其の間宗教が其の方針を誤つたならば、何等の活動も出來ず、徒らに拱手傍觀して貴重なる歳月を送るの他なきに至るであらう。

吾人は國家主義的な思想も、人道主義的な思想も、人間の眞實性より觀れば、皮相の爭ひの如く觀ぜられるのである。宇宙の眞實を把握し、移して以つて我が眞實性を磨き出だしたる者には、問題は彼に非ずして是れにあるを自覺すべき筈である。卽ち彼も是も、此の眞實の一義に目醒めたる時、何等の問題もなく總てが、解決せられるのである。是れ日本國民の天職であり、日本宗教の使命でなければならぬ。

善良の慰安者

俗世間を出離して聖者の心境を味ひ、民衆を白眼視して自ら高處にあるを誇つた、超現實的な宗教生活が、其の價値を全然失つて、實生活と深き交渉を持たねば、活動も救濟もあり得ないと心付き、街頭に出でんとしたのは、最近の傾向である。

然るに俗世間に於ては種々なる問題が現れてゐる。社會問題、思想問題、階級問題等が踵を接して、其の解決を迫つてゐる。是等の問題に出會つて、我が信仰我が教義、よく此の難問を解決すべしと高調し、隨分附會の說をなして得々たる者がある。

一體宗教は社會上に起る諸問題を、理論的方法によつて解決するのが本旨だらうか。教祖或は開祖の說いた教義中には、結論とも見るべき言葉がないでもない。けれどもそれは近代に起つた複雜な問題に對する解決としては、決して當を得たものではない。

吾人の所懷を卒直に云へば、問題或は鬪爭の理論的解決は、宗教家が專念せなくとも、他に其の人があると思ふ。然るに極貧弱なる知識を以つて、解決し得るなどと高言するのは、身の

程を知らぬ者の盲動である。

宗教には宗教の分野がある。是れを教祖に付いて觀よ。何れの教祖と雖も、社會的の問題を解決をしたのではなく、世の苦しめる者を慰め、病める者を救ひ、恒に弱者の味方として、信仰を與へ、生命を援けつゝあつたのである。故に其の一言一句は冷やかなる論理に非ずして、慈悲に滿ちた暖かなる詩であつた。

現代人が宗教に要求する所も亦、此の情意の方面ではなからうか。理智的の不滿を持つてゐるならば、宗教に是を求めずして、學問に依つて之れを滿すであらう。唯人間として正しき意味に於いて、情意の滿足を得る道が、宗教を他にしては在り得ないのである。何故なら放縱なる生活や、刺戟多き生活が與へる、本能的な滿足は一時的であり、且つ自分を亡ぼすものであるが、宗教的情意の滿足は自分を生かす道であるからである。

之れを要するに今後の宗教は、現代人の情意を滿足せしむる、教師でなくして伴侶でなければならぬ。問題の解決者でなく、問題で苦しむ者の善良なる友でなければならぬ。此所に宗教家が活動する分野が、明らかに展開されて來るのである。

善意の反逆

既成の社會組織に、何等の不滿も感ぜず、束縛は幸福なりと信じた時代には、人間の意識は色盲の如く、無批判の生活を續け得たのである。然し意識的に覺醒した人間は、最早や左樣した幸福を、屈辱ここそ思へ決して幸福などゝは感ぜなくなつた。

其處に大なる不滿が生じる。既成社會に對する批判が行はれる。時にそれは反逆の姿を以つて現れる。甚だしきは既成社會を破壞して、新たなる社會を實現せしめんとする、突飛な思想をも生ぜしむる。

吾人は斯くの如く無謀なる思想には、斷じて組することは出來ないが、同時に又た既成社會を、何等の批判もせずに其の儘受け入れて、幸福と感ずるが如き思想に對しても、同意することを欲せない。

既成社會の組織が、文化された人間の要求を、充分滿足せしめない程度にあれば、是れを改善する爲めに努力すべきは、充分の理由が存在する。然るに其の聲を聞かず、徒らに舊習を墨

守する者ありとせば、其の間思想の爭ひは止むを得ない所である。

然し破壞のための破壞こそ、より良からしめんが爲めの反逆とは同一に論ずべきではない。社會の進歩發展は是れを歴史に徴しても、恒に反逆者と其の時代に目されたる人々の間より出てゐる。故に其の反逆も誠意に基けるものならば、よく其の眞意を理解すべきである。無理に壓迫し去るのは、禍根を大ならしむる外何んの得る所もない。

然るに事實は殆んど反對に、新しき思想、新しき主張が生れたならば、必らず是れを非難し壓迫せんと試みるのである。殊に傳統の久しき既成宗敎には、斯うした傾向が著しく現れてゐる。其の結果自ら門戸を閉ぢて、束縛に依る幸福を甘受し、何等社會的活動を欲せない、無爲の徒となつてしまふのである。

何れの時代にも新思想が現れるのは、現れねばならぬ必然的理由があつて現れるのであるから、其の理由を深く檢討して、嚴正なる批判の下に其の良否を決し、誠意あるものは認めるの雅量がなければ、社會の進化も、敎派の發展も望まれぬ。故に吾人は誠意ある反逆は、徒らに感情に走らず、眞面目に研究し、以つて進化發展の資材たらしむることを、識者は心懸くべきだと思ふ。

誕生の地へ

苦慘の生活に直面して、汗こ埃に塗れつゝ、辛じて生命を持續する者に、宗敎や信仰の如き玩具が、何の必要があるか。如何に食ふべきか、此の根本事實を顧慮せぬ、經文や聖書は、有産の徒が時日を空費する、閑文字に過ぎぬではないか。生々しい生活苦に脅される者に、金銀を鏤めたる殿堂や、五彩の袈裟や衣が何んの關係があるか。現實に卽して生きんとする者には、最早や宗敎や信仰は全く不必要な過去の遺物に過ぎない。

斯くの如き思想から、宗敎を否定し信仰を排斥せんとする傾向が、最近著しく現はれて來たのは事實である。是れには科學的思想の影響もあらう、過激思想の流行にもよらう。其の他社會學、經濟學の餘波もあらう。其の理由は何れにしても、事實は動かすことは出來ない。

然し其の宗敎の否定が、人間が先天的に有する、信念までも否定せむとするのであらうか。既成宗敎を否定せんとするのは確かに一面の理論はある。實生活に苦惱せる者が、反感を持つのは當然とも云ひ得やう。けれども幾千年の間、各民族が持ち續けて來た、宗敎的觀念を、根

本的に否定せんとするのは、蓋し思はざるの甚しきものである。

殊に新しき宗教は、如何なる民族の間に於ても、民衆の間から誕生してゐる。生活の苦痛が極度に及んだ時、其の生活苦を逃れんとした時、新興の宗教が孤々の聲を擧げるのである。故に宗教は本來、民衆の爲めに生れ、民衆を救ふべきものである。民衆と離れては如何なる宗教も、其の生命を失ふのである。

然るに無産者の手にて造られたる物を、有産の徒が種々なる手段に依りて、取り上げるが如く、宗教も亦民衆の手より有産者の領域に取り入れられたのである。殿堂の大を誇り、裝飾の美を示さんとするは、是れ宗教が有産の徒と、手を繫れたる證據ではないか。實生活に沒頭する民衆が、此の形式的な宗教を否定せんとするは、俄かに排し去るべき問題ではない。

宗教が原始の思想乃至信仰に立ち歸へるならば、再び街頭に出で民衆の間に生きねばならぬ筈である。實生活と信仰が不離の關係にあることを、實際に於いて證さねば、信仰を失ふ者も不幸であれば、宗教自體の將來も不安である。故に吾人は各宗教が、飜然誕生の地に歸ることを痛切に希望するものである。

精神生活

急激な時代の變化は、社會生活を樣々に動搖せしめて、少しの安定さへ與へぬ程である。次から次へと踵を接して現はれる事件は、徒らに混亂した神經を鋭敏ならしめ、暫時の暇さへ與へない、人口の驚くべき增加は、生活を止め度なく困難に陷れ、就業難の聲を高からしめてゐる。

加ふるに歐洲大戰後に起つた、不健全なる社會思想が輸入せられて、人心を極度に昂奮せしめたので、實際生活を靜視するだけの、心の平靜を失つてゐる。況んや自己を內省して、適當なる手段方法を見出すが如きは、夢にも考へてゐないのである。生活に追はれ、困難に見舞はれ唯求めて喘ぎ走るのみである。

從つて青年が口を開けば、直ちに生活難を唱へ、眞劍の生活を語るのは決して無理とは云へない。人生の苦痛を未だそれ程に體驗せない者をして、斯く感ぜしめるだけ現在の社會生活は悲慘なのに相違ない。然し云ふが如く果して眞劍な心持を持つてゐなければ、生活が出來ない

ものであらうか。

無論眞面目な眞劍な心持で、社會に處して行くのは惡るいことではない。だが人間の勢力は限りがある。あまりに緊張も度か過ぎると、却つて衰弱を招くものである。青年が神經衰弱に罹り易いのは、全く偶然ではない。

想ふに現代の人々には生活難とか、就業難とか、勞働爭議とか社會問題だとか云ふ概念化された言葉に、囚はれ過ぎてゐるのではなからうか。自己の生活狀態が切迫詰つてゐない者でも、生活難とか就業難とか騷いでゐる。實に呆れたものである。

人生に對する今少しの理解と、生活に對する多少の興味を感じたならば、同じ境遇同じ生活をしながら、精神的に餘裕のある生活が、確かに出來るべき筈である。現世を左樣苦痛視せなくとも、心の轉換一つで、享樂し得られると思ふ。

精神的に何等の餘裕を持つてゐないのは、現代生活の大缺陷である。物質生活に沒頭し過ぎた結果、此の惡弊を造つたのであるが、是れに禍される者こそ不幸である。今後は此の不幸より脫しなければならぬ。

精神生活は此の窮地を脫する。唯一の世界であるが、直ちに理想的な生活を望めとは云はぬ。眞劍にならなくとも濟む程度に於いて、社會を靜觀し生活を批判し得る、平靜な心が持てるだけの精神生活を營む必要がある。

神靈と地場

教團意識の上に立つて、信仰生活と心得て居る者には、地場の中心の思想は教團維持の點から云つても、自己生活の保證から云つても、甚だ都合のよい主義に相違ない。然し日夜布教の實際に當面して、助け一條に苦しめる者には、神の直接なる守護に依つて、生活を持續せなければならぬのであるから、當然神靈中心の思想が、地場中心の思想に、先行せなければならぬ筈である。

地場中心と神靈中心、と全然離して考へてゐる者もあるが、是れは其の觀方が違つてゐる神靈と地場とは本體と現象の樣なもので、地場は神靈の宿る所であり、神靈は地場に於いて最も鮮やかなる表現が成されるのである。神靈なき地場は人なき家の如く、地場なき神靈は手足を失へる人の如きものである。兩者が相融合する所に、本教の眞生命が躍動し來るのではないか。

本教の歷史を觀ても、神靈が信仰の中心であつた時もあれば、地場が本教の中心であつた場

合もある。表大工に裏鍛冶屋と云ふ、教祖の遺された譬喩は、此の間の消息を意味せられたものではないか。本教徒は宜しく時に應じ旬に從ひ、取るべき道を誤つてはならぬ。

教祖の年祭を機會として、地場中心が力說せられて既に年を重ね、殆んど今や行詰つてゐる眞理に行き詰る筈はない、然し人心に倦怠の生じた以上、新たな刺戟を望むのは事實である。助け一條に眞面目に勤める、部下先々の信徒や布教者に、神靈中心の叫びに共鳴者の多かつたのは、抑も何を暗示してゐるのであらうか。

本教徒の思想は事實に於いて轉向してゐる、地場に向つてゐた心が、內容充實の聲に依つて反對に信者の方へ向つてしまつた、唯冀ふ所は信者の上に、神靈の守護を受けんことである。教會の內容を充實せしむるに、神靈の働きを受けることである、朝に祈り暮に祈り夜に祈るのは、神靈の恩寵を願ふ外何ものもない。

生死の枕頭に座して、神に祈願する者の心と、教團意識の上にあつて、多數を相手に暮す者とは、其の生活の樣式も、思想も信仰も同一であり得ない。自己の爲めに不都合であるからとて、他を否定するのは面白くない。況んや苦しき信仰の體驗を有せずして、人心を混亂せしむ

るに於てをや。

吾人は神靈中心の思想こそ、行詰れる本教の布教に、一生面を開かしむべき時旬の理たるを信ずるのである。惱める者、苦しめる者、病める者を救ふて、生命と喜悅を與へるものは、神靈の光が其の心と肉體に宿るからである。是れなくて本教は、他の既成宗教と何んの擇ぶ所があるか、今は布教の時であり、お助けの旬あでる。助けは不思議なる神靈の特別なる恩寵に待たねばならぬ。神靈中心は茲に其の價値を現すのである。

昭和三年八月五日印刷
昭和三年八月十日發行

著作兼發行者　奈良縣山邊郡丹波市町三島　增野道興

印刷所　奈良縣山邊郡丹波市町川原城　天理教々廳印刷所

終